

婦人  
と子ども

第四卷第一號

## 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人ど子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

## 會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれますと、雜誌は常會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌丈け買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十七年一月二日印刷  
同 年一月五日發行

不許  
複製

發行所	東京市神田區西小川町一丁目一番地
編輯者	東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷者	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所	女子高等師範學校附屬幼稚園内
發賣所	東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北隆館

謹　　み　　て

新年を賀し

併せて

會員　　諸君諸姉の  
讀者

萬福を祈る

明治三十七年一月元旦

フ　　レ　　ー　　ベ　　ル　　會　　編　　輯　　員

# フ　　レ　　ー　　ベ　　ル　　會　　規　　則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員ダラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ提出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
- 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス
  - 一 會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
  - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
  - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セズトスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
  - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
  - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 會長 一人 會務ヲ總理ス
  - 主幹 一人 會長ヲ補助シテ會務ヲ掌理ス
  - 幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
  - 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ノ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ變更スルコトヲ得ス

東京市日本橋區通三丁目

東京市京橋區南傳馬町二丁目

附  
白

弊店等出版の高等女學校、師範學校、中學校等教科用圖書は紙質を精撰したる彫刻印刷を鮮明にしたる製本を堅牢にしたる等大到教育界の賞讃を博したり今や時運の進歩に伴ひますく善良なる圖書を出版し聊か斯界に貢獻せんとす乞ふ自今倍舊の眷愛を賜はらん事を

女子高等師範學校教授佐方鎮子先生合著  
文部省檢定濟

●女子作法書

女子高等師範學校教授關根正直先生編纂文部省檢定濟一

女子國文讀本

女子高等師範學校教授野口保興先生著（文部省檢定済）

女子科  
本邦新地誌  
全一冊  
定價金六十錢

女子高等師範學校教授 郭口保興先生著（文部省檢定済）

外國新地誌 全一冊 定價金七十錢

女子高等師範學校教授齋藤鹿二郎先生編

女子本邦地理 全一册 定價金五十錢

●教科ノ言士現

**女子外國也里**

女子高等師範學校學科招領胸照三英寸半身綵  
全一冊

定價金六十五錢

教科書  
國  
地  
理  
第一冊  
定價金六十元

女子高等師範學校教授下村一四吉先生編

國史新本 全二册 下卷 金五十五錢

女子高等師範學校教授下村三四吉先生編

女子教科書  
日本歷史  
洋裝全一冊定價金七十五錢

女子高等師範學校教受下村三四吉先生稿（文部省檢定齊）

女子東洋歷史

女子高等師範學校教授下村三四吉先生編  
文部省檢定済

女子科學叢書  
**東洋歷史附圖**  
全一冊定價金二十五錢

女子高等師範學校教授下村三河吉先生編纂（文部省檢定濟

女子西曆史  
洋裝全一冊定價金七十五錢

● 華禾 丁巳 五月 庚辰

女子教科書  
西洋歷史附圖  
全一冊  
定價金三十五錢

女子高等師範學校教授下村三四吉先生編纂、文部省檢定済

女子外  
國  
小  
史  
西洋編 冊定價金五十錢  
東洋編 冊定價金五十錢

女子高等而範學教養下寸三四吉七主編纂(文部省)鑑定齊

●**女子外國小史** 附圖  
東洋編 一冊定價金二十五錢

教科 外國人學問 西洋編 冊定價金三十五錢

女子高等師範學校教授 藤森太朗先生編

校用算術彙編  
全三冊  
定價各五十錢

森先生編

代學用女校  
數初  
全一冊  
定價金五十錢

女子高等師範學校教授森岩太郎先生（文部省檢定済）

女子變女斗 何初步 洋裝全一冊定價金五十錢

● 學和 乃 作 不 立

女子高等師範學校教授佐方鎮子先生 合著（文部省檢定済）

增訂  
**家事教科書**  
洋裝和裝上卷定價四十五錢  
全二冊下卷定價四十五錢



# 學校參考書新刊稟告

●家事教科書 家計簿記法 洋裝和裝全一冊 定價金二十五錢

女子高等師範學校教授後關野先生 著 文部省檢定濟一

●家事提要 洋裝全一冊 定價金五十五錢

女子高等師範學校教授黑田定治先生 著

●女子用教育學教科書 全一冊 定價金

女子高等師範學校教授東基吉先生 著

●女子用博物學 全一冊 定價金五十錢

女子高等師範學校教授理學士大渡忠太郎先生 編纂 文部省檢定濟一

●女子用博物學 全一冊 定價金五十錢

女子高等師範學校教授理學士平田敏雄先生 編 文部省檢定濟一

●女子用化學及礦物學 全一冊 定價金六十錢

女子高等師範學校教授谷田順子先生 著

●裁縫教授法 洋裝和裝全一冊 定價金二十五錢

女子高等師範學校教授谷田順子先生 著

●裁縫教科書 全二冊 定價上卷三十五錢 下卷二十五錢

女子高等師範學校教授小野千代子先生 著

●小學裁縫教科書 兒童用三冊 高等十七錢 教師用三冊 各二十錢

女子高等師範學校教授谷田順子先生 著

●東京女子手藝教育會編 女子造花手藝教本 全一冊 定價金三十五錢

東京女子手藝教育會編

●女子摘み手藝教本 全一冊 定價金三十五錢

女子造花手藝教本附圖

●女子摘み手藝教本附圖 全一組 定價金三十五錢

女子摘み手藝教本附圖

●女子用器畫法 幾何全一冊 定價金二十錢

女子高等師範學校教授東基吉先生 著

●幼稚園保育法 全一冊 定價金七十錢

小野篤堂先生著 文部省檢定濟一

●女子習字帖 全四冊 一、二、三、四卷各定價二十錢

多田親愛先生著 文部省檢定濟一

●女子習字帖 全四冊 一、二、三、四卷各定價二十錢

學務院講師阿倉秋永先生著 文部省檢定濟一

●新編女子習畫帖 一、二、三、四卷各定價二十錢

廣島縣高等女學校教授谷田信太郎先生 編

●女子唱歌集 第一集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第二集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第三集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第四集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第五集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第六集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第七集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第八集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第九集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

●女子唱歌集 第十集 洋裝全一冊 定價金四十五錢

女子高等師範學校教授關根正直先生 編

女子高等師範學校教授 東 基 吉 君 著

前付四

# 幼稚園保育法

フロエベル氏肖像及手技彩色圖形入り製本美麗

幼稚園教育のこと近來漸く盛なるに至りたりといへども悲しいかな之が原理方法等につきて詳細に記述したる書籍なきを以て日々斯業に従事せる保育者其人に於ても更に進んで研究發明の參考に資するものなく殊に新に斯道に従事せんと欲する人に於ては遂に以て保育の何たるを知るに由なく爲めに百事日新の時に當り幼稚園のみ遅々として獨り舊觀を改めざるが如き有様なるは實に我國教育界の一大恨事といふべきなり。本書は著者が多年實際につきて研究推敲せられたる結果になりたるものにして先づ筆を一般教育より起して家庭教育學校教育を詳述し次いで幼稚園の必要保育の要旨保育の事項方法等其他一切幼稚園に關する實際の事項は勿論フロエベルの傳記學說等に至るまで一々明瞭に記述して餘す所なく殊に附録として幼稚園の設備をも添えたれば何人も本書に由りて幼稚園の原理と實際とに通ずるを得べく幼稚園保育者は勿論小學校教師並びに特に家庭の教育に心を用ゐらるゝ人々に取りては必讀無二の良書といふべし。乞ふ續々御注文の榮を賜はらんことを

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地

發行所

目 黑 書 店

本月二十日發行  
定價 七 拾 錢  
郵稅 六 錢

# 婦人と子ども第四卷第壹號目次

## 卷首

母の愛

## 子ども

ばら姫

大蛇の土産

二人の音楽師

いそつぶ物語

室内のお遊び

考へものの答

## 婦人と子ども

婦人方へ

子供の新年外四首

割烹十二月(むつき)

婚姻の性質

鹽津みやげ(その四)

野口幽香

まうへ

石井泰次郎

谷川清

和歌子

禁煙のすゝめ

東基吉

初春

雨峰

黒澤登幾子傳補遺

下村三四吉

偉人の學校時代

米溪

新光

雨峰

幼稚園の遊戲(その一)

松村ひさ

子供の性行

林壽祐

二四戲會

在京都 楠田睦

忙中閑語

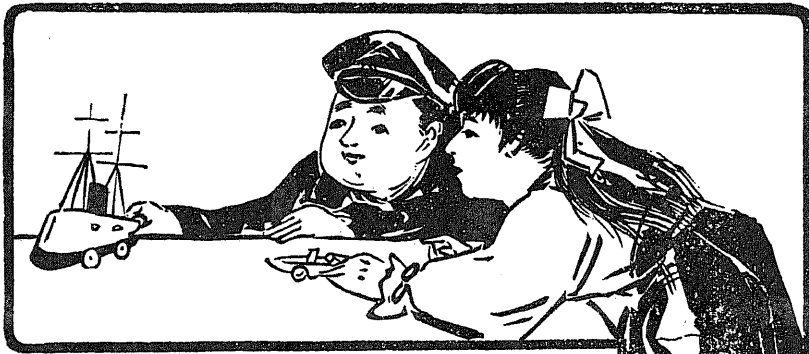
其子

## 雜報

編輯局より●日本女子と蒙古王の家庭教師●高等女學校に幼稚園を附設せしむる建議●男女交際論●兵庫縣通信●新刊紹介●會報



愛 の 母



# も と 子 と 人 婦

## 號 壹 第 卷 四 第

ばら姫物語

やまとの翁

むかしもく大むかしのこと  
まづある處に、一人の殿様があ  
りましたとさ。なか／＼威勢の  
いゝ殿様でしたが、たゞ一つの  
不幸なことに、一人も子とい

ふものがあります。夫で、奥様と二人で、毎日毎晩、そのことばかりいって歎いて居りました。所が、ある日のこと、奥様が一人で、お湯を使いながら、やはり、その事について、考へて居らっしゃると、そこへ、ひょいと、一匹の蛙が飛び出して來て、妙な風に兩手をついて、奥様に申し上げるには

『奥様、そんなに御心配なさらなくても、來年のお正月には、きっと、美しいお嬢さんがお生れになりますよ』

奥様は、夫をおき、遊ばして、はて妙なことを聞くもんだなと、れぼしめして居らしたが、やがて、その年もくれて、あくる年のお正月になりました所が、ちゃんと蛙の言った様に玉の様なお姫様が、お生れになりました。



奥様のお喜び、殿様のお喜びは申すも愚なこと、多勢の家來どもまで上を下へと喜んで居ります。お正月のお祝ひに、かへ加へて御安産のお祝といふので。

そこで、殿様は、其お祝をなさるといふので、大勢の御親類がたやお友達をお招きになりました。處が、其所に、十三人の魔術使ひの賢女があるから、これも一所にお招きをするといふ事でしたのが、相憎、殿様のお手許には、此婦人方に食べさせる金のお皿が、丁度十二枚しかないといふので、一人を残して、十二人丈をお招きになりました。

さて、其晩になりますと、案内を受けた人は、皆集つて來まして、立派な宴會が始まりました。しますと、十二人の賢女た

ちは、皆一人づゝ立って、此赤兒の前途の運を祝します。一人  
 は、まづ『徳高かれ』と祝ひますと、次の賢女は、『美しかれ』  
 と祝ふと次には『富み榮へよ』といふ様に、皆が揃って世界  
 中で出来る丈けの賜を以て、前途を占ひます。さて、だん  
 この様に致しまして、丁度十一人目の賢女が祝って仕舞った所  
 へ、丸で電光の様に、其席へ飛び込んで来た女があります。誰  
 かと見ると、彼のとり残された一人の魔法使ひでしょう。自分  
 がとり残されたといふのを、ひどく恨みに思つて恐ろしい面相  
 をして、此席へやって參つて、大きな聲を上げて叫びました  
 『いや皆さん、此お姫様は生長くなって、十五年目の誕生日が  
 來ますと、紡錘のために、屹度死んで仕舞います』



かういふや否や、彼女はどう何  
もいはないで、ツイと出てしま  
ひました。

まー、何といふ不吉な占ひで  
しよー。折角皆が、あの様に、  
末のことを、壽ほぎ祝って居た  
所へ、こんな恐しいことをいは  
れたので、皆が一同に慄い上る  
位、恐れました。所が、そこに  
居った十二人目の賢女は、徐か  
に立って、自分のお祝ひを申し

ました。然し、もはや彼の惡女の言つたことをうち消すことは  
出来ないのです。次の様にいて、それを弱くしようと思いました。  
『いに皆さん、ご安心なさい、姫は決して、死ぬのではありません  
せん、たゞ、百年の間眠る許りなのです』

\* \* \* \* \*

夫から、殿様は、どうかして、十五年目の災難を逃れさせた  
いと考へまして、國中に命令して、紡錘といふ紡錘は、一切焼  
き捨てよと命令しました。

年月の経つのは、早い者で、姫は、だんく生長します。生  
長するにつれて、彼の誕生祝ひの占ひが、ことごとく當りまし  
て、まこと、賢女の祝った様に、しとやかで、美しくって、怜

惻で柔順で、夫はく立派なお姫様になりました。所が、生れ

てから、丁度十五年目の誕生日がきた時、殿様と奥様とは、お

留主になって、お姫様一人、御殿に居りまして、廣いお城の中

を、こゝかしこと、方々を歩いてごらんになって居ました所が

そのお城の片隅の所に、古い塔がありましたので、お姫様は、

此塔の戸を明けて、其中に、這入って見ました。

所が、不思議なことには、其中に、一人の老婆が居て、せつ

せと麻を紡いで居ります。はて、妙なことをして居るなと思し

召して お姫様は、何氣なく 其側に寄つて、

『こんな、糸が巻き付いて廻はって居るのは何？』

といって、その紡錘を取って、御自分で、廻はして見ようとし

ました所が、忽ち彼の不吉の占ひが當った。と申すは、姫は、其紡錘のために、一寸、指を刺しました。ハッと思ふと同時に其處にあつた寢臺にうち倒れるが最期、と——く深い——く長い眠に陥って仕舞ひました。

所が、此眠りは、たゞお姫様一人に留まらないで、御殿中残らずに擴がりました。殿様と奥様とは、此時丁度御還御になつた所でしたが、御室に這入るや否や、眠って仕舞ひました。夫から、家來どもも残らず、一所に眠り込みました。まだ驚くべきことは既に居る馬から、軒に留って居る鳩から、壁にすがつて居る蠅から、おまけに、燃はて居た火まで動かなくなる、料理番が、臺所で、戯に、女中の髪を引っ張って居たのが、其儘



うち倒れて、二人とも、グー／＼いびきをかき始める、風まで  
 が全く已んで仕舞って、丁度落ちかゝって居た木の葉が、途中  
 で留って居るといふ不思議さ。

\* \* \* \* \*

年月が、だん／＼経つに従って、此御殿の周圍には、一面に  
 荆棘の木が生ひ茂って、誰も入り込むことも出来ねば、中の容  
 子までも、さっぱり見えない位でしたが、たゞ美しいばら姫の  
 ことは、誰いふとなく、國中に擴って居ますから、時々、吾こ  
 そ、彼の姫を救ひ出さんと企てる者がありました、誰も／＼  
 此荆棘の茂みの中に這入っては、出ることも進むことも出来な  
 くなって死んで仕舞ったといふ事です。

夫から、何年か経つた後のこと、或日一人の少年が、此土地に來まして、一人の老人に遭つた所が、老人は、何かの序に此荆棘御殿の話をして聞かせました。即ち此の荆棘の茂みの中には立派な城があつて其中には、ぼら姫といつて奇麗なくお姫様が、もー彼れこれ百年も眠つて居らっしゃる、殿様も奥様も、其他御殿のものは、残らず眠つて居る、夫から、其老人が自分のお祖父さんから聞いた所によると、今迄何人とも數知れぬ程の少年が、此中に入り込んだなり、死ん仕舞つたといふ様なことを咄しました。

此物語を聞いた少年は、『夫では、私が、之から入り込んで見よう』と言ひ出しました。老人は吃驚して、今迄何人となく、

死んだ事故、とても、駄目だといって、とめましたが、中々やめ相にもありません。

所が、此時は、お姫様が眠って百年目に當って居て、丁度お姫様が、目をお醒ましになる年であつたのです。夫で、少年が支度をして、荆棘の中に潜り入らうとしました所が、不思議なことに、さしも、今迄は、入り込め相にもなかった所の、荆棘の茂みが、獨り手に左右に開いて道を開けます。夫で、少年は、づんく進んで行つて、とく御殿に這入って見るとなる程、聞いたに違はず、すっかり眠って居る。まづ例の馬から犬から、軒に居る鳩を始め、じーっと寝込んで居る。室に這入って見ると、蠅が壁にひつついたなり眠って居るし、臺所に

は、料理番が、女中の髪を握んだなり眠って居る。構はずに、  
 尙奥へ進むと、殿様の居間には殿様始め奥様から家來ども、  
 残らず寢入って居る。こんな具合ですから其靜な事といったら、  
 丸で、自分のつく息の音さへ聞える位であります。少年は、だ  
 んく方々を見廻はりまして、とく彼の古塔の所までやつ  
 て來まして、入口の戸を開けた所が、こゝには彼のぼら姫が、  
 寢臺によりかゝったなり、靜かに眠って居ります。  
 少年は、一目見て、さては之が、有名なぼら姫だと思つて、  
 恐るく側によつて抱き起さうとしました所が、其拍子に、姫  
 は、はっと目を醒ました。

で、少年は、手短かに、自分の來た譯を語つて、夫から、二

杭生



人つれだつて、御殿の方へと來  
 ました所が忽ち、殿様と奥様と  
 續いて家來共まで、目を覺まし  
 て、皆不思議相な顔をして、互  
 に見較べて居ります、さし、こ  
 ーなるといふと、今まで眠つて  
 居った馬が、ヒーンと鳴いて、  
 身を慄はして居るし、犬は尾を  
 振って駆け始め、軒に居つ  
 た鳩は、頭を羽の下から出して  
 來て、一寸見廻はして、飛んで

行くし、蠅は壁を離れて、這ひ出しまするし、火も燃え始めれば、女中は、引っぱられた頭の髪を、ふりほいて大根を煮かゝる、料理番は、ハッハッハッと笑ひながら魚の料理にかゝるといふ騒ぎで、御殿中は又元の様に、賑かになつて、しかも誰一人、變つた事のあるたといふ事に、氣が付くものがない。何故かといふに、百年の間、眠つた儘で、別に、誰も、變つて居ないからです。

\* \* \* \* \*

此少年といふのは、隣國の殿様の公達でして、お仕舞に、ばら姫と、御夫婦になつて、いつまでもく御繁昌にお暮しになりましたとさ。

めでたしく



## 大蛇の土産

さて、今日は一つお目出たい、面白い話をしてみよう。

むかし、ある處に、田野久左衛門といふ人がありました。生れ付いて、親孝行な人で、お父さんには、早く別れましたが、年老つたお母さんをば、大層大事にして孝行を盡して居ました所が、此田野久左衛門は、もとゝ農夫ですけれども、生れ付いて、芝居が上手なのです、夫に近頃は不作為で、田のものも、畑のものも、思はしく、出来ませんから、農夫の方は、己めて今では、大低、芝居をして其儲けた金で、一人のれつ母さんを養つて居りました、夫で、名前もあんまり長すぎますから、誰も田野久左衛門なんて

いふ人が居りませんで、大低の人は、皆「田野久」といつて呼びますし、自分も、其方が宜いと思つて居ました。そこで、田野久の評判は、其村許りではなく、遠方までも聞こえて、どうも、田野久の藝は中々甘いと、どこでも言いはやして居ます。

所が、或年の暮、隣り村に祓祭りがあつて、其時に一つ芝居をやらうといふことで、とうゝ田野久の一座を雇ひに参りました。仕方がない、田野久は、お母さんに分れるのは、いやですけれども、お金儲けのことですから、暫らく行つて来よう、いふので、お母さんにお別れをして、仲間の人等と隣村へ乗り込んで行きました。すると、隣り村では、大評判、田野久一座の芝居だといふので、毎日、中々の大入りです。

所が、困つた事が出来ました。夫は 田野久の  
ねつ母さんが、大病になつたといふ報知が、來たの  
です。さ、孝行者の田野久ですから、もう暫ら  
くもじつとして居られませんか、皆が、明朝にした  
らといふのを振り切つて、其晩方、すぐ仕度をし  
て、たつた一人で村へ歸りかけました。

田野久の考では、何でも、明日の朝までに家へ  
着かうといふ積りで、大急ぎで以てやつて行き  
ます、所が、隣村との界の所に、大きな山がある  
一體、此山は、昔から 天狗が出るとか、おぼけ  
か出るといつて 皆が恐がつてゐるものですから、  
夜になると、誰だつて越える者がなひのです。然  
し、田野久は、そんな事を恐がつては居られない  
うかくすると おつ母さんに遭はれないかも知  
れないといふ考から、なわに、恐いものかといつ

て、どしどし 此山を越えかゝりました。

さて、だん／＼坂道を上りつめて、とう／＼此  
山の峠まで來ましたのが、さようさ、丁度、夜中  
の二時頃でしたらう、人影は無論のこと鳥も、獸  
も、皆寝しづまつて居ると見えて、其寂しさとい  
つたらなひ位、田野久は、やつと、こゝまで來て  
まわ一休と思つて、見ると、そこに小さな小屋が  
ある、で、その中に這入つて、暫らく休んで居り  
ました。所が、さあ大變、どこでとなく、ゴーツ  
といふ大きな響がしたと思ふと、今度はザーツと  
いふ音と共に、山も木も小屋も、一度に吹き飛ば  
され相な大風が吹いて來ました。さすがの田野久  
も、これには避易して、小屋の隅の方に小さくなつ  
て居りますと、大風は、暫くで已みましたから、  
まゝよかつたと、ひよいと 顔を擧げた所が、

これには又二度肝をつぶした。身の丈一丈もあらうといふ大入道が、鏡の様な目を光らかして、こんな具合に、上から、田野久を睨まへて居ました。田野久は、一目見たなり、慄へ上つて念佛を言つて居りますと、其大入道が

『コラ、貴様は何者だ』といひます。

『はい 田野久で』と蚊の様な聲で言ひますと大入道は

『何だ、たのきだ、つまらないじゃないか、已は年來此山に住んでる大蛇だが、實は、貴様を人間かと思つたのだ、夫じやわざ／＼出かけてくるに及ばなかつたに。しかし、まてよ、たのきにしては、餘程甘く化けて居るな、すつかり人間に見えるよ』

といつて、もう全く感心して居ます。



田野久は、小さくなくて聞いて居ました、だん／＼聞いて居ると、どうも大蛇の先生田野久といつたのを、たのきと聞き違つたらしい、之ではひよつとかすると助かるかも知れない、一層のこゝとこまでもたのきになつて居てやらうと考へて居ます。

すると、大蛇は

『オイ どうだ 中々化けるのが甘い様だが、一つ已の前で 坊主に化けて見ないか』

といひ出しました。田野久は、ハット 困りました、たが、荷物の中に いろ／＼芝居の鬘を持つて來た事を考付いて、『へい／＼、今化けます』といつて、一寸後向いて、坊主の鬘をかぶつて、『さー化けました』といふと、大蛇は『之は 中々甘い、今度は小さい女の子に化けて見よ』といひますか

十八  
ら、田野久は 又娘の鬘を被つて見せると、大蛇は又感心して『なる程、たのきは何にでも化けるゝな 已は たつた一つ、こんな大入道にしか化けられないんだ どうも情ないな』など いてしきりに羨ましがつて居ます。

かういうことから、田野久と 大蛇とは、とう／＼お仲よしになつて、いろ／＼な事を話し合ふ様になりました。で、何やかや話して居る中に、大蛇の言ひますには、『おれは 世の中に、何ゝ厭な者が無いが、煙草の脂が一番嫌だ、あれを、ぶつかけられると、丸で、身體が腐つてしまふからなわ、どうも あれには叶はないのだ』など言つて、『時に、たのき 貴様は 何が嫌だ』と聞きま

すから、田野久は  
『へい、私は 世の中にお金ほど嫌なものはあり

ませぬ お金を見ると、もうたまらなく恐くなり  
ますよ」

すると大蛇は『へー お金、妙なものが恐いのだ  
な』と不思議がつて居ましたが、其中にだんだ  
ん夜が明けかゝつて來ましたので 大蛇は大急ぎ  
で、引き込んで仕舞ひました。

『やれ／＼危かつた』と田野久は、其小屋を出て  
山を下り様とします所へ、樵夫どもが、大勢やつ  
て來て、田野久を見て、屹驚しました。といふの  
は田野久の顔の色が、もう眞青になつて居ました  
からです。夫で、だん／＼譯を聞いて見て、大蛇  
に遭つたのだといふことが分りました。咄の序に  
田野久は、大蛇が一番嫌なものは 煙草の脂だ相  
なといふことをいつて、其譯を話しました所が、  
樵夫どもは、夫はいゝ事を聞いた、夫では、今か

ら、すぐ脂を集めて來て、大蛇を退治しやうとい  
ふので、村中の人總がゝりで、煙草の脂を集めて  
夫を大きな樽に積み込んで、どん／＼と山へ持つ  
て來て、之を水鐵砲の大きなので以て、大蛇の住  
んで居る、穴を目がけて 打ち込んだ所が、不  
思議や、一天俄にかき曇り、大風さつと吹いて、山  
も谷も、今にも崩れ相な響がすると思ふと、長さ  
十丈許りの大蛇が、其穴から飛び出して、大空遙  
に飛んで行きました。

さて、田野久は、其話を樵夫にして置いて、す  
ぐ、自分の宅へ歸つて來ました、おつ母さんの病  
氣は、思つた程悪くもないので、まづ／＼と安心  
をして、大事に看病をして居りました。

すると、或晩のこと、表の戸を とん／＼とた  
いて、『オイ、田野久 田野久は居るか』と呼び

ます、そこで、田野久は、はて誰だらうなと思つて、表の戸を、ひよいと明けて見て『ワーツ』と腰を抜かしました。

戸の外には、彼の大入道が、所々血だらけになつて、大きな目を光らかに、立つて居たのです。田野久の腰を抜かして、そこに打ち倒れたのを見て、大入道は

『やい 田野久、此間は、よくも己の嫌なものを饒舌つたな、その爲めに おれは、とう／＼こんなになつた。さー今夜は、其敵打ちに貴様の嫌な土産を此通り持つて來たのだ』  
といひながら、いきなり 金貨だの 銀貨だのを取り混ぜて 幾らとなく手當り次第に打ちつけて歸つて行きました。

田野久は、丸で夢心地でありましたが、入道の

歸つた後で、やつと氣がついて、そこいらを見ると、これは如何、家中一杯にお金だらけ。

夫で、田野久は、大蛇の土産のお蔭で、いつになく、お芽出たい お正月を迎へましたとさ

めでたし／＼

## 二人の音樂師

樵村生

或る夏のことに、獨逸國のウインと申します町の公園で、れ天氣の極く美しい日に大層盛なれ祭が御座いました、其の時に此町に住んで居る人々は身分の尊い人も、身分の卑い人も、若い者も、年寄も、幾万人と數へ盡されぬ程公園へ遊びに出かけました、其の中には又外國から遊びに來て居る人なども澤山雜つて、面白く、楽しく此の盛なお祭



を祝ひました。總て何處でも人出の澤山ある處には、見るも氣の毒な乞食が集るものであります。此のお祭の時に澤山の物賣が出て参りました、其の中に一人の哀れな兵隊上りのお老翁が参りましたが、此のお老翁さんは外國の諺に「若い時には兵隊で、年を取つては乞食となる」といふことのある通り、兵隊の成れの果てゝあつたので御座います、で、乞食の仲間には或は足腰の役に立たぬ不具の者もあれば、子供に手を引かれて行く盲人もあれば、何かの藝をして観客から一錢二錢の志を貰ふものもあります、而し此のお老翁さんは人に物を貰ふにも兵隊上りの意氣地がありますから、何れに「どうぞ一文やつてください」といふことが出来ません、そこで自分が若い時分に少しばかり習うたことのある胡弓をひいて

錢を貰ふと致しました、勿論極々下手で御座いますから、此の老人の思ひますには、假令私が胡弓をひくのが下手であつても、私の灰色に成つてゐる顔や、跛になつて居る足や、ぼろ／＼になつて居る衣服などを見たならば、あゝ可哀想にと思つて錢をくれるであらうと思つてるので御座います。

儲、多勢の人が公園へ這入つて來る道の傍に枝振のよい大きな楓の樹があります、其の木の下へ老人は腰を卸しまして、胡弓をひき始めました、此老人には一疋の能く馴れた犬がありました、何時も老人が胡弓をひき始めますと、其の犬は自分の口に老人の帽子を啣へて、立つて聽いて居る者の前へ行つて、いくらかづゝ錢を其中へ入れて貰ふと致します、處が老人は力一ぱいに胡弓を



旅

ひきましたけれども、どういたしましたものか、  
誰れ一人錢をなげてくれるものはなくつて、皆な  
高笑に笑ひながら通り過ぎて終いました、犬の口  
に啣へられある帽子はまだ空のまゝ残つて居るや  
うな有様です、

聽て、もう太陽も暮れかゝりまして、四邊の仲  
間は家へ歸る仕度をするやうになりましたけれど  
も、老人の帽子の中には一錢も這入つて居りませ  
ん、日は暮れかゝつて仕度をするので御座います  
から、老人はもう貰へるといふ望がありませんで  
した、そういふ有様で御座いましたから、老人は  
大變心配致しました、外目ながら其心配の様子が  
ありくと顔に顯はれて参りました、錢は一文も  
貰へず、日はくれかゝる手は疲れはて、もう如何  
してもひくことが出来なくなりました、其上又、朝

から立ちつゝはてありますから、足も疲れてしまつたのでとう／＼傍の石の上に腰を卸しまして物思ひに沈みました、老人は自分の手で額を押えてうつぶして居りましたが兩つの眼からは玉のやうな涙が地の上へぽつりぽつりと落ちて参りました。偕てかう力を落して慨き悲んで居る老人を久しい前から注意して居つた一人の立派な外國人が居りました、而し老人は其外國人には少しも氣がつかまません、其外國人は打萎れて居る老人が悲みの餘りに涙まで流したのを見て、大そう憐れな心を起された能く／＼注意して見ますると其の老人の手には憐れにも、指が三本残つて居るのみでありました外國人は老人の傍へ参りまして、懷から幾らかの金貨を取り出して、之を老人に渡しまして、そして、

「私に暫くの間胡弓を貸して下さいませんか。」と言ひますると、老人は喜んで早速胡弓を外國人に渡ししました。

老人は唯糸をかきまはじて居つたのですから、善い音を出しませんでした、今此の外國人が使ひますると、誠に美しい音を出しました。外國人は老人に向つて、

「私か胡弓をひいて上げるから、貴方は錢を集めなさい」

と云ひますると、今迄外國人がひいて居る胡弓の美しい音に聞き惚れて、どうして自分には美しい音が出ないのに、此の人が使うとこのやうな音が出るのだらうと思ふやうな顔つきで、ちつと見て居つた老人は、四邊に聽人が集まつてゐるのに氣がついて、早速帽子を取つて錢を集め始めました

誠に此の外國人がひきました胡弓の音は、前に老人がひいて居つた胡弓ではないかのやうに美しい音を出しました。清い樂しけな音を出します時には、恰當女の神様が御聲をお出し遊ばすやうで又悲しい沈んだ音を出します時には思はず知らず其音が胸に染み込んで涙が出る位であります。そういう風に誠に上手の引き手で御座いましたから今迄振り向きもしないで通り過ぎて終つたものが皆立ち止まつて、一人として其處を過ぎる者はない位になりました。聽いて居る者は皆息を殺して其美しい音樂の音に聞きとれて居ります。で、次第に四邊に立て居る人々の輪は大きくなりまして、尊い身分の人達さえ、車をとどめて聞いて居るやうになりました。暫くはそうして多くの人々が立つて聞いて居りましたが、何故あの見すば

らしい老人が錢を集めて、外國人が胡弓をひくのであるかと云ふとが、わかりませんでした。處が時がだん／＼経つうちに、それは巧みな音樂師が老年の衰れた廢兵の爲めにひいてやるのだといふとが知れました、すると又夫を聞いて居りました者は皆哀れの心を起しまして、われも／＼と古びた帽子の中へ錢を投げ入れるやうになりました、そこで其の帽子の中には金貨だとか、銀貨だとか銅貨だとか、色々のお金が充滿になりました。お金を集める爲めに馴らされてあつた犬は、自分の主人がお金を集めるのを見て、變な顔をして見て居りました。其上に、自分の主人が胡弓をひいて自分が集めた時には一文も貰へなかつたのが、知らぬ外國人がひいて自分の主人が帽子を廻はすと降るやうにお金が入りますから、其犬は驚かす

には居られません、處で、もう充分にお金が満ちましたから老人は夫を他所へあげました、外國人は、尙ほひいてくれますから、老人はやはり、帽子を以て聽衆の前へ参りますと、忽のうちに、又其帽子が、充滿になりました。そうしますと、外國人の眼は喜びを以て輝きまして、益々熱心にひきました、此の外國人が胡弓をひきます間は、丁度聽衆の人々は死人のやうに静かてありますが一曲くつゝ終りますと、又賞讃の言葉で、まるで嵐のやうで御座います。そういう風に賑やかであるのが、又ぞろひき始めますと、皆水をうつたやうに静かになります。音樂師は喜ばしい、楽しい調子にひく時は、聽衆も亦樂しげになつて悲しい哀れげな調子にひきますと、又人々の顔は悲しげに見えます。

兎角するうちに、日ももうくれて、寒くなつて來ました、外國人はそこで『我君に幸多かれ』といふ歌を謠ひ出しますと、此の歌は聽衆の能く知つて居る歌で御座いますから皆帽子を取つて一齊に聲を立て、歌ひ出しました、聽衆の人々が一齊に謠ひ出しましたから外國人も非常に元氣づいて熱心にひきました、四邊は静かになつて居つて日暮れ頃で御座いましたから、其聲は大そう大きい響をしまして、暫くは鳴りを止みませんでした。すると外國人はもう充分に、廢兵の爲めにお金を貰つてやつたし、其上元氣のある『我が君に幸多かれ』の歌を謠ひましたから、胡弓を老人に渡ししました、老人が『どうも有難う御座いました』と御禮を言ひ畢らない内に何處へか行つてしまひ

ました。

『あの方は誰ですか』

と群集の人々は廢兵の周圍に押し寄せてきて、問ひかけますと、元より少しも知らない人でありますから、

『私は知りません』

と答へました、尙ほ老人は言葉を繼いで

『私はあの方のお蔭で腹一ぱい食べるとが出来るやうになりました誠に有り難く思ひます、蔭ながら健康に幸ひに在らっしゃるやうに願ひます』と非常に喜びました、

そうしますと一人の紳士が群集を分けて出て参りまして言ひますには、

『私は能くあの方を知つて居ります、あの方は

二三日前此處にまゐりました方で、胡弓ひきの名人で御座います、いつもこういう風の慈善の爲めに死盡しなさるお方であります』

と話されました、尙ほ其紳士は言葉を繼いで、『皆様と一所に此の御禮を申さうではありませんか』

と云ひました、すると一同は皆自分／＼の帽子をとつて其の外國人の万歳を唱へました、猶ほ自分達の國の廢兵をこう云ふ風にして置いたのは、如何にも自分等が、悪かつたと氣がつきましたから、更らに幾許つかを老人に與へました、老人はこういう深い恵みに預りましたから、大變に喜びまして老人の頬には熱いうれし涙がこぼれました、そこで老人は手を組んで神様に向ひ、『どうぞ私を救つてくだされた多くの人々に恵み

を與へて下さい』

と祈りました。

其後此の老人はもう胡弓をひくをせず、無事に一生を送つたといふことで御座います、

(獨逸物語中より抄譯)

いそつぶ物語

其四十四 子供と狼

羊の番をして居る子供が、何時も、狼だく。と呼び廻はつては、吃驚して出て来る村人等を見て、指さして、嘲笑つて居りました。所が、或日の夕方、眞個に狼がやつて來たので、これは大變だと思つて、大聲を上げて、『狼が來た誰か來てくれ』といつて、走り廻はりましたが、村人らは、又彼の小僧めが惡戯をして居るといつ

て、誰も出てきてくれません、夫で狼は、思ふ存分に羊を捕つて食つて歸りましたとさ。眞實のことをいつても、嘘咄きの言ふことだと、誰も信じません。

其四十五 子供と蛙

子供らが、よつてたかつて 池の端で遊んで居ると、蛙どもが、時々水の上に頭を出して来る、夫を面白がつて石を投げつけては殺して居ますと、とうとう 其中の一匹が 頭を出して來て言ひますには『子供さん、お願いだから、どうか 止して下さいな ねなた方は、夫で面白いでせうが、私共は、一匹づゝ死んで行くのですよ』

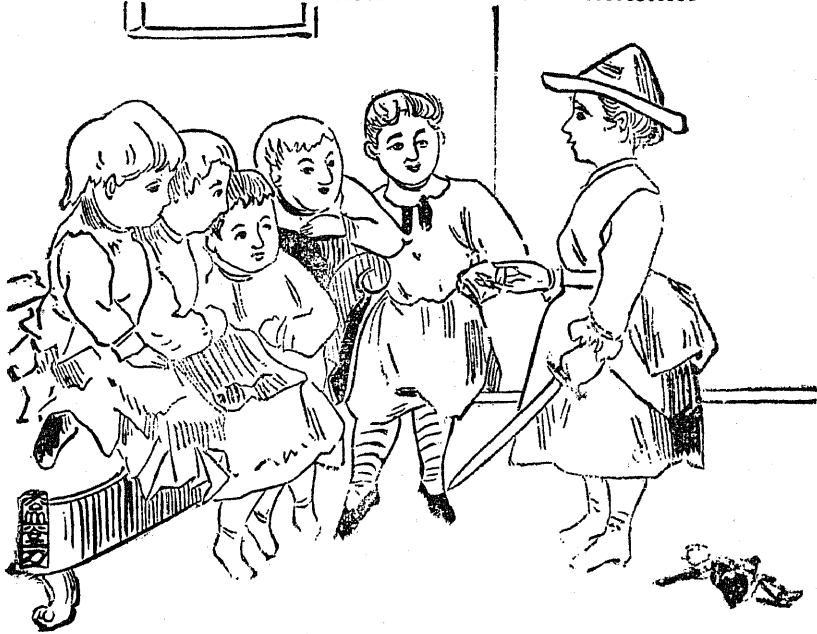
室内のお遊び

(六) 南京さん

一人の子が、南京さんになつて『私は南京さんで  
す私は ドを賣ります さあ〜買つて下さい』  
と言つて歩く。すると、他の子供は、支那で出来  
る物の中で、始めに ドの字のつく物は何だかを  
考へて言ひ當てるのです。早く言ひ當てた人は、  
代つて南京さんになり、又何か 違つた字を代へ  
て言ひ歩きます。

(七) 飛べ〜鳩よ

皆が寄つて、片手を机の上に出して置きます。そ  
こで、一人が傍に居て「と〜鳩よ」と言ひま  
すと、すぐに皆が手を机から離す、然し、若し飛  
ぶことの出来ないものと言つて 例令ば「飛べ、  
馬よ」など言ひ出したら、皆じつと手を其儘に  
置くのです。若し間違つて、そんな時に 手を上  
げたり 又は飛ぶ時にむつとしたりして居たら、





罰金を取られることにするのです。

(八) 手巾遊び

四人で、手巾の四隅を持つて居ると、一人は其側に居て、「確り持つて」と言ふと、四人はすぐに手巾を離す。「離して」といつたら、反對に、確り持つて居るのです、誰でも間違つた人は、罰に當てられます。

(九) 土と言つたら犬

皆が寄つて、輪に成つて座ります、さて其中の一人が、手巾を取つて、土、火、水、空氣の中で自分の思つたのを一つ言つて、其手巾を座つて居る誰かに向つて投げるのです。すると、投げられた人は、其手巾を取るとすぐ、例令ば「土」と言つて投げられたとすれば、土に住む者、何でもよい犬とか牛とか言つて答へる「水」と言つて

投げられたら 水の中に住む魚の名を言ふ「空氣」と言はれたら 鳥の名を答へる「火」と言はれたら 黙つて受ける、投げる人は、投げて置いて、一二三四五六七八九十と數へて居る、其間に受ける人が答が出来なかつたら、次に他の人に投げる、間違つて 例令ば 水と言はれて 馬など答へる者があつたら、罰として脱される、甘くすぐ言ひ當てたら、その人は、やぐに又 水なら水といつて、他の人に投げるのです。以上は三つとも、ごく手早くやらねば面白くありません。

◎考へもの

一番、前號の答 時計の針。二番、人を乗せた馬。

婦人子ども

婦人方へ



野口 幽 香

まづ新年しんねんふめでたう存ぞんじます。とは年寄としよりも子供こどもも、男おとこも女をんなも、金持かねもちも貧乏びんぼう人にんも、人ひとといふ名なのつく人ひとは皆みな口くちに稱とへ、遇あふ人ひと毎ごとに祝いはひあふて、黒塗くろぬりの祝い膳ひぜんに屠蘇とそくみかはす人ひともあれば、十切とぎれのお餅もち買かふにも母はは親おやを一考いつかうせしめたのもあらう。が、兎とに角かく、年末ねんまつの騒さわ々さうしさも一晚過ひとばんすくれば俄にわかに長閑のどかさを感じかんじ、同おなじ寒さむさの風かぜも急きふに和やはらいた様やうな心持こもち、まづ元日ぐわんにちから三ケ日七草にちなしちさ頃迄までは、我わも人ひとも何なんといはれず心こころのゆつたりとするもので、さすがに人事じんじの複雜ふくざつも、こゝ一寸ちよつとは遠慮えんりょして、むつかしい相談さうだんや面談めんだんなかけ合あひは、一時ひと休やすみの姿すがたで、お難養がうにとか歌留多かるたとか、朝あさから夜迄ばんまで騒さわいて居ゐる内うちに、はや學がく校かうも始はじまる、出で來きた春衣はるぎもぼつ

くともよまれて来る。さうなつて見ると何の事はない、一寸見た夢の様で、うかくとこゝ過してしまふのである。

何が故にさうめでたいのか知らねど、めでたいといつて皆嬉しそくに喜んで居る時に、一人世捨人か何かの様に、めてたくないとこられるにも及ばぬ、面白く出来るだけ面白く世を渡るのは、誠に望ましい事である。私は考へる、併し何とかいふ坊さんのよんだ歌、かの

門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし

かう考へて来ると、一寸、めでたいくと、うかれてばかりは居られぬ心持となつて来る、お互が一年をとつたのは疑もない事實で、慥に冥土へ一足か十足か近つたのも亦争はれない事實であります。私の知つて居る年寄が多年病床にあつて、それこそ人から見ても、嘸死にたいだらうと思ふ様な人の自白に、かうなつても吾眞情は決して死にたくない、世間の死にたいといふ人は、まだ眞に死の近いて居らぬ人であつて、實際死が近づいては、決して死にたいものではない、せいひました。私、これが人間の眞のさけびであらうと思ひまして、同情に堪へませんでした。かくいふ私も、同じく一ツ年がふえて、次の一里塚へ着いたわけ、かるたに浮かれて居ながらも、一寸まじめにならざるを得ないので、過ぎし年はどうであつたか、一向何も成績がない、をとゝしはどうか、それも同様、其前の年は、又其前は、と考へても、一向同じ様で、三年前の自分と、けふの自分と、余り違つても見えません、こ

んな事ではならぬ、今年一月一日からは、勉強もしやう、勞働もしやう、怒るまい、いやな顔もすまい人にも親切をしやう、こゝろもしやう、あゝもしやう、と希望は新たにわきいで、覺悟はなか／＼見事なもの、それが七草でもすむと、そろ／＼と地金が出て来て、つまる處、一年の終りは又もとの默阿彌新年が来ると又其覺悟が新たにされる、とかういふ風に、年々歳々同じ事を繰り返して、行きつく先は青山か染井ときまつたもの、併しこれは、私の事で、誰かが決してかうではない、若い男女はいふ迄もなく、年とつた人でも、一年一年進歩して行く人があるので、死ぬまで進んで行く、それが眞の人といふのであつて、私の様なものは一段一寸下つた人といはねばならぬ。されば私は皆様をして、どうぞ私の様な生涯をお送りにならない様に、ふりかへつて去年を見れば、心密かに満足の微笑の出来る様な生涯をおすゝめしたい。

これを讀んで下さる幾百たか幾千たかの人の内には、今年が新年の終りになる人もあるかも知れませぬ不吉の事をいふといはれましようが、どうも事實ですからしかたがありませぬ、しかも其籤の番は誰に當るか知れませぬ、されば皆眞面目に考へて自分が其くじに當つても遺憾のない様に、けふ今より満足の一日を重ねて行きたいではありませんか、満足、人からはどう見えてもよろしい、何となり勝手の批評を下されてよろしいが、自分を知る事自分に勝る者はありませぬから、其自分が深夜靜に考へての満足、良心の満足、無上の平和、これが得られましたならば、其人はたとい自分は女中で、生涯人の臺所

に勞働して終りまして、其貴さは王侯貴人よりも僅に以上に位して居りまして、又此人一人の満足するのみに止まりませんで、必ず其小さな行が、思ひもよらぬ所へ感化を及ぼしまして、其結果どんな形に現はれて来るかはかられませぬ、人生の幸福を、馬車や御殿に求める様な人は、別者として、右いふ様な幸福を求められんことを希望にたへませぬ。

九段の坂を上つてもなかく苦しいが、富士の頂上迄でも覺悟して上れば、存外容易く行かれるとの事富士にも増して行路難き人生を、奇麗に上り終らうといふには、非常な覺悟がなくてはならぬ筈、それをつたいした覺悟もなく、九段の坂を上る心持で、富士以上の難路を歩まうとする故に、一步一步血の涙を流すのである、子供と青年は先づ別者として、世の中に踏み出した、といふ人は、誰も彼も同じ經驗をするので、幾億かの人間は、同じ難路に泣いて居るのである。併しながらこれも覺悟次第で、喜んで楽しんで、歩いて行く事も出来るのである。然らば其覺悟とは如何なる事かといふに、まづ世の中に立つてから死ぬ迄、一日も休のない戦争があつて、毎日毎日それに打勝つて行くといふ覺悟がなくてはならぬ、これに勝つのと負けるのとで、人間の眞價が定まるので、前にいふた良心の満足とは、此日々の戦争に打勝つた人の状態をいふのであります。人生の最大なる敵は何かといへば、それは已といふ事で一方からいへば、献身といふ事がこれに對する唯一の武器であります。試に、誰かもし不平があるならば、其原因を調べて御覧なさい、必ず利己といふ事に歸するのであります、不平に思ふ人も利己なれば

不平がらせる人も利己、利己のより合故、そこに衝突が起るので、もしも一方が利己であつても、一方が献身の行爲に出れば、衝突も起らず、一家は平和で、つまり献身した人に、また幸福が歸つて来るわけになる。献身と一口にいへは何でもない様だが、實際はそれはなかくつらい事で、まづ自分が死なねばならぬ、刀をとつて死ななくとも、已、私、我慾、すつかり殺してしまつて、自分の生存は自分以外の人の爲、夫の爲にする人もあるべし、子の爲、親の爲、友の爲、君の爲、社會の爲、何でもよろしいから、自分の居る境遇に應じて、誰かの爲に生きて居るので、自分の樂の爲、自分の幸福の爲、自分の慾の爲に、生きて居らぬといふ事の實行、たとひ其事が以何に小さくとも、人の爲といふ事が凡ての行の動機になつて居れば、それが献身の生涯といふので、一度これが實行の出来たる人は、心の底にいふべからざる平和と喜びが充ちて來て、毎日の眼前の出来事には打勝つて余りある位の勇氣も出て來るものであります。尤此平和忍耐勇氣、これらを得やうといふには、容易の事ではないが、又中には容易に得られる人もあるので、此秘訣を味はつた人が、一家の内に一人居れば、家内中平和と喜に充たされるし、社會の中に一人居れば、其人の大小は違ふが、其まはりの人が喜んで暮せる様になるのであります。私に深き感じを與へた實話を左に

昔私の住つて居りました隣の奥さん、それはそれはよく働く人で、朝私が顔洗ふ時、窓から向ふの庭が見えますが、夏ならばいつでも洗濯物が幾枚もはしてあつて、張板にはちやんと張物がしてある、

私はまだ起きたばかりに、と何ともいへず恥かしく思ひまして、もう早幾年かの昔の事で、其人の名も顔も忘れて思ひ出せませんが、其行はしみこんで私をして時々反省せしめます。

も一つのお話は、私の親類のこれも隣の奥さんの事です、子供が六人か七人で女中なし、朝早くから夜遅くまでそれは／＼働きづめ、きけば夜は十二時迄仕事をなさるゝとして、其多くの子供達のもの一枚も外に出さぬ、しかも子供のなりは誠に奇麗にしてあつて、玩具等各自引出しが區別してあつて、凡ての躰なか／＼嚴重だそう、雨降りの翌日は大小幾つかの足駄がちゃんど洗はれてはしてゐるそう、さすがに奥さん自分だけは手がまはらぬと見えて、着物もきたなく髪もぼう／＼として居るとの事、私は此奥さんを見た事もなければ、たつた右の話をきいただけ、それで深く私にしみこんで、又しても／＼人に語り人も我も怠惰を戒められて居ります。

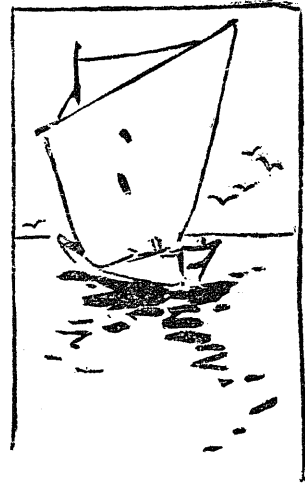
書いて見れば、一向とりたてゝいふ程の事でもない様でしようが、私に生涯忘れぬ程の感じを與へたのは不思議、此二人、もとより私を知らず、私も亦二人を知りませぬのに、かうも感じるのは、此二人の行が献身的であるからなので、自分の知らぬ感化を人に及ぼすと私の前にいつたのはこゝをいふのであります。

されば私は人間といふ者は、誰に限らず已を捨てゝ、何かの事に従事せねばならぬと思ひますが、とりわけ婦人方に其献身をおすゝめするのは、一家の中心はどうしても主婦でありまして、主婦といふ者は

他家から入り込み、随分習慣思想も違つて居りますから、其人が献身を實行すれば、一家内の平和はうけ合ひ、夫も親も子も下女も、皆喜んでそれ／＼業を熱心する事が出来るので、人生の幸福とは、かゝる主婦をいふのであらうと思ひます、年改まり人の心にも新しき覺悟のほしき時、何かの御参考にもならうかと思ひまして。







子どもの新年外四首

ま  
う  
へ

子どもの新年

小指折りまちわぶる子らの新年を

むかへてやがて何求むらん

親の新年

新年をいさみ迎ふる子らの爲に

今年の幸をまづ祈るかな

新年

しばらくは池にひそめる龍の子の

天かけり行く年は來にけり

教の道

蒔かぬ種の生えむものは人の子の

教の道もおなじとぞ思ふ

爐邊閑讀

おもふどち語らひ居れば埋火の

にはうあたりは冬としもなし

割烹十二月月（むつぎ）

石井泰次郎

一月の料理には、名のめでたきを以て、第一となすが今も流行なり、屠蘇の昔すぎたる、饅餅の今様なるも、だいたい、かちどり、梅ぼし、

柑子、こんぶ、野老、海老、齒菜、ゆづり葉の

掻敷の上にづらねて、こはぎの料とするは、

昔今の料理法のいづれにも偏せぬなるべし、右

のうちの原料を以て料理れる料理法あり

◎結昆布、ムスビコンブはムツミヨロコブとの意

にて用ふるとかや

昆布の青さを、水に浸し置て、洗ひて、湯煮して

取りあげて、切方して、結びて、砂糖、醬油にて

煮染て用ふべし、結やうは玉章の如く、一つむす

びにすべし

◎鰾、子孫繁昌によそへて用ふるとかや

數の子の料理法は、冬春の内にとのへて、客に

も出すなり、あへもの、あんかけなどにす、數の

子を水にて洗ひ、水に二三日漬わくうち、水度々

かへてよし、かくて能くふやけたる後に、色々に

用ふべし、能く水氣をさりとて布にてふきて、から

し酢みそにて和て用ふべし（ねりみそに、からし

と酢とを加へて煉りたるを辛子酢味噌といふ）又

水をきりて、水をぬぐひて、醬油のよろしきに漬

て、能く漬たる時、皿にとり分て、上より花かつ

をを振かけて進むべし（花かつをとほ鰹節を小刀

にて極めて薄く細く削りたるをいふ）又水をさり

て、水にて洗ひて、煮え湯へ漬て、湯を切て上よ

り葛だまりをかけて、上に山葵をふるして少し置

て進むべし（葛溜とは、葛あんにて、かつを煎汁

の汁へ、味噌と醬油を合せ煮かへしたるに、葛粉

を水にてときたるを入れて「入る、時、片手に持

子を持つて鍋の内をかきまぜるべし」あんにつく

る）味のあまさからさ好によるべし、又葛あんに

かけだして煉味噌をつくりてかくるもよし

◎小殿原 田作とも云ふ、ゴマメ鯛の事なり、ゴ

まめ又は、田作の名を以て用ふるとかや

普通の料理法は、かしらと腹とを一度にはす切に取りて、焙燥にて能く炒りて、手にてもみて粉をおとし、扱湯を煮かへしたるに漬て、後に味淋と砂糖、鹽などにて味をつけて煮るべし、又いりたるまゝなるを、味淋と醬油を同位に合せて煮かへしたる、てりの中に、いりたてを入れてかきまぜて用ふ、又湯につけたるを細くさきて、白髪大根に合せて酢の物にして用ふべし

◎開午莠 ひらくと云ふは祝の心にて、皿の上に

ひらきて盛る故にいふとかや

午莠、梅田午莠とてふとき午莠あり、この時は、

よく土をあらひて、輪切で五六分に切て、湯に入れて、煮る事、二時間して、後にかつを煎汁を以

て、煮るべし、味は砂糖と醬油少しとを以て煮る

べし、又味淋を入れるれば一段とよし、又午莠を細

く長く切りて、米をとぎたる三番位の水に入れて

よくさらし、水氣をよくさりて、胡麻の油にてあ

ぐることあり

◎穗俵 ホンダワラともいふ、神馬藻の名によつ

ても用ひ、ほんだわらといふ名によりて用ふると

かや、正月の春盤にかゝず置物なり、俗に穗俵本

俵と書したり料理法は、水にて洗ひて、湯煮して

さしみの取合せや、又はからし味噌あへにして用

ふべし

◎俵海鼠 とらごともいふ、生海鼠なり、申海鼠

煎海鼠などあり、生は秋のものとす、

申海鼠の料理法は、水につけ、湯煮する事一晝夜

以上して、後にあとさきを切て、腹をわりて中の

砂糖をよく洗ひさりとて、煎汁、味淋、鹽にてやわらかに煮びたして、其まゝ茶碗にもり、砂糖をかけて進む（水には二日以上つけおくべし、煮るに砂糖を用ふれば、のちに砂糖かけずともよし、砂糖は、ザラメ砂糖を紅にてそめて用ふべし

（附録 料理覺帳）

◎料理の二字は、はかりをさむるとよみて、食物を調ふる事ばかりに限らず、何事にも取計らひ調ふる事をいふなり、食物を調ふるを、料理すと云ふも、右の心なり、本は食物を調ふる事をば、庖丁するとも、調味するとも云ふなり、あんぱいと云ふは、鹽梅の二字なり、上古は味噌醬油も醋もなし、鹽と梅を以て味を調へたる故、鹽梅といふなり

◎餅の事を女の詞に、かちんと云ふは、かちいひ

なりかちは搗の字なり、うつともつくとも、よひ字なり臼杵にて物をつくる事をかつといふなり米麥などをつくるを米かつ麥かつなどいふなりいひとは飯なり、こはいひをつきて餅にする故かちいひと云ふなり、かついひを略して、かちいと云ひ、かちいを轉じてかちんと云ふなり。

婚姻の性質

谷川 清

婚姻と云ふ字義は本來夫妻たる關係自体を表明する用語であると云ふことは第三卷第三號に述べて置きましたが、其關係の性質に就きましては學者間に種々様々の議論があります、其議論の原因と申しますものは婚姻は男女の共諾に因りまして成立致すものであると認められましたる結果、之

は一種の契約であると申す者と、否、決して契約ではないと申す者との二説があります、猶ほ法律上一定の方式を具へましたる男女二人の意思表示に因りまして始めて其効力を發生致しまするものでありますれば、此點に於ては確に一般要式の契約と毫も異なる所はありません、ですから二人已以の合意を以て直ちに契約であると申せば婚姻も亦一種の契約であります、然し財産上の關係を目的と致しする合意のみを以て契約を致しますれば婚姻は契約ではありません、婚姻は決して財産關係を目的と致して居りませぬからです、我國の民法上では契約は債權債務を目的とする合意であると云つて婚姻を契約とは別物に致して居ります、今一例を擧げてお示し申せば契約は近親の縁者間たりとも

爲し得べけれど婚姻は絶対に出来ません、此外兩者の差違する點は夥多ありますが略して置きます然れば婚姻の性質は何如と申せば自然的狀態に於て人間の一身より觀察致しますれば男女兩性の器械的結合としか申されません、又社會的方面より觀察致しますれば男女の結合たる公の性質を有し法律上夫妻と認められする結果其間に權利義務を發生致します、此權利義務は唯だ男女雙方間のみに止らず引いて社會公衆に對するものとなります、故に近世諸國は法律制度の規定に従ひ婚姻を致さざれば法律上何等の効力をも附與しませぬ婚姻は禽獸の會合とは自から其性質を異に致しまして單純に同類をして永久斷絶せしめざらんが爲めのみではありませぬ、必ず人世の艱苦を共にし互に扶持するを以て目的と致します、即ち是非の

辨議力を有する人類の獨り專有する所であり、  
す、故に近世の學者は

婚姻とは法律を以て公認したる一男一女の共  
諾に因り共同生活を目的とする生存間の關係  
である

と申して居ります、然し一男一女の共同生活が  
最も男女兩性の生理的精神に適し家族及社會の秩  
序を維持致しまするに必要であると認めましたる  
のは近世の事で御坐りまして殊に今日の文明國に  
於てのみ行はるゝ所の思想であります、されば未  
開國の婚姻には前述の定義は到底適用することは  
出来ません、故に婚姻の定義をして一夫多妻の  
「モルモン」宗の國にも數夫一妻の西藏國にも一  
夫一婦の歐米諸國にも悉く適用することを得る様  
に致しまするのには婚姻は法律上認められたる男

女兩性の結合であると云ふ外はありません、法律  
上認められませぬ男女兩性の結合は道徳上認めら  
れたるものと雖猶野合と稱すべきものであります  
我國の民法は歐米諸國の普通なる婚姻の思想を採  
用致しましたる故に近世學者の定義は之を我國民  
法に於ける婚姻にも適用することが出来ます、其  
結果次の四條件を具備することを必要と致します

第一、一夫一婦たる事、

第二、共諾ありたる事、

第三、畢生の結合を目的とする事、

第四、法律上一定の條件を具備したる事、

であります、而して我國の民法上で婚姻の豫約  
(許嫁の如きもの)を認めませぬから男女の意思は  
婚姻當時に存在することを必要と致し、我國  
從來の婚姻は多くは婚姻すべき男女の意思に因り

て成立致しませぬから法律上全然無効たるは勿論  
其意思に出でたりし時と雖單に豫約に止る時は法  
律上双方の身分に關して何等の效果をも生じませ  
ぬ、従つて万一違約することなどがありましても  
法律上少しも制裁する所は御座りませぬ。

### 鹽津みやげ(その四)

#### 和歌子

●英夫(四年二ヶ月)は随分何をでも言ふ事ができ  
るけれども、片言が多くて舌が廻らぬ。ワを皆ア  
と言ふので、和歌山をアカヤマ笑うて居るをアロ  
テルなど言ふ。ダ行が皆ラ行に發音するので「ミ  
ルヲタクサンクンレキテミルレッツボーレアソビマ  
シヨー一二三四チュッ／＼チュ」(水を澤山汲んで  
來て水鐵砲で遊びませう)など、大聲で歌ふ。此

歌の外に鳥はカー／＼と氣笛一聲が得意なので、  
興に乗じて廻らぬ舌で歌ふ處頗る愛嬌がある。  
舌切雀の話も得意なので清子(七年九ヶ月)や千代  
子(六年三ヶ月)に向ては瀕に話すのであるが、大  
人が行くとき止める。其話の中で、私は老人ですか  
ら、といふ處を、アタサトツソリヤサカイニ、と  
云ふのがお定まりで、之が家人一同の笑の種であ  
る。凡て拗音も正しく發音する事ができぬ。

●八月のある日、清子千代子英夫に近所の絹チャ  
ンをいれて、をばさん諸共五人づれで小山のあな  
たの小川に遊びに行く。堤の草原の上にまといし  
て唱歌をする、御菓子を食べる。今に川の水の中  
に入りたいと言ひ出すであらうとをばさんが思つ  
て居ると、果して清子が第一着に小川を見返りな  
がら「ハイリタイヨー」と許を乞ふ。「ハイリタイ人

はハイツテモヨロシ―」と言ふや否四兒共殆ど同時に飛び込む。深さ二三寸に清らかな水がチヨロチヨロと流れ其處此處に水なき砂地がある。まるで子供のため川のやうで其喜其満足は形容のしかたがない。各自衣服を端折り筒袖を肩までたくり上げて、池を掘るやら川の中に又川を流すやら魚を生けて置く處を作るやら、木の葉を浮べて鯛や鰹にするやら泳いで居る正眞のメタカを捕へようとはね廻るやら、少時歸るを忘れて居つたが正午に近づいたので足を洗つて歸途に向ひ、又たんば道をつたい小山を越えて歸宅した。

●又八月の或る日、けふはおばさんの誕生日といふので其御祝紀念の小遠足をする事になりおばさん、清子、千代子、英夫の四人は菓子を提げて山一つあなただの濱にと志しました。山道で「皆デチ

ガツタ花ヲイロくアツメマシヨ―」とのをばさんの發起に三兒は躍起となりて採集する。とうとう小さい眼と手で集められた草花が山の頂上に着いた時には二十餘種で各の手に溢れんばかり。さても山も見ゆるべく海も見下すべく遙かあなたは我家も見ゆる此山の上にまゐりて草花を中央に菓子を食べる。其時の兒等の喜は實に非常なものであつた、少時して下山の途につき細い山道をたどり遂に志す濱邊に達した。其處には大分永くつかはぬらしい古い小舟がたつた一艘ツクネンと砂原に捨てられてある。前には穏かな浪がうちよせて、後の方は山ばかり、人といふものは小さい三人とをばさんとばかり、山と海と吾等と舟と天地は只之だけなので、其静かな事は何とも言はれぬやがて砂遊びがばじまる。海水に浴する。貝を拾



ふ。をばさんが骨を折つて海膽を生捕りにして、子供等が其針の多いのに驚く。かの小舟の中で菓子を食べる。書をかく。歌をうたふ。海水のいかにも青く見へるのをたへる。沖ゆく帆かけ舟の敷をかぞへる。實に三兒の活氣は此靜かな自然の中でをどり立つて居る。正午に近くなつたので程近き岩の上に釣しに來た漁夫に頼み其舟に乘せて貰つて海路家に向ふ。舟に乗つてから浅い處では岩にくつついて居る無數の海膽を見付けて大さわざ。深い處では何も見えぬので只片手をのばして水に入れて居る。手は水を切つて舟と共にスーツと行く。「エーアンバイヤ」と氣樂なもの！世の浪風を知らぬ小さい三人と、をばさんと、皺だらけの眞黒な漁夫と一葉の舟に棹さして、大海原の陸近き浪靜かなあたりを行く様、誠に詩的で一幅の

好畫題ではあるまいかなど、をばさんは思つて居るが、三兒は海は只廣々とした愉快な處舟は動くから面白いものとして喜んで居るのである。さて正午歸宅して食卓に向ひ、今日お祝の赤飯を前にわれ一と三兒が此遠足の物語り。

○又八月のある日、千代子や英夫の阿父さんは、小舟を一艘購はれた。英夫の曰く「アノ舟阿父サントアタシトナカマニスンノヤ」と、さて此舟に名を命ずる事になり、英夫の將來の榮を祈る心で英榮とは、とのをばさんの發議に、かけ聲の様でもしろいといふ一同の賛成に由つて、即日此舟を英榮號と命名した。

○八月の末のある夕、明朝は御祖母さんをもをばさんも清子文子も、一月あまり住み馴れた此地を去るといふので、御名残りに大人二人子供三人で、

かの英榮號に乗つて岸近き海に出た。沖のあなただに漁り火遠く、近き山々は静に立ち、月は山の端を今しも上る。様々の唱歌をのせて舟は浪のまにまに漂うて見たり、漕ぎ廻つて見たりする。此邊の漁夫が常に舟を進むる時にするかけ聲をまねてヤツチンヨ／＼ヤツチン／＼ヤツチンヨと大小五人が調子に乗つてかけ聲する。忽ち清子が八千代に連想して「キミガーヨ／＼」とうたひ出した。即ち一同正座して沖に面して謹でうたつた。月夜、海上、小舟中の小さい人の聖代の頌、遠近の山にいかにかいたか。

# 禁煙のすゝめ

東 基 吉

本誌の讀者は悉くは婦人でないのみならず、本

誌は家庭で多く讀まるゝことであるから、余はこゝに、喫煙を嗜まるゝ男子諸君に向つて、禁煙のおすゝめをし、はたかゝる人を夫に持たれたる夫人に向つて、このすゝめを其良人にせられんことを望むのである。而して、余は十五年以來の喫煙の習慣を、昨年八月三十日を以て、全く廢した事を述べて置く。

喫煙の害は既に言ふに及ばない。殊に少年に於て此害の甚しい事は、既に我が國に於ても、法律を以て禁止したのである。一般人間の心身に及ぼす危害を數へて見ると、第一、齒を弱くし、肢體を乾燥ならしめ、顔色を蒼白ならしめ、次に記憶力を減じ、眼力を弱くし、胸部、頭腦に血液を上騰させ、従つて頭痛を惹起し又咳嗽を催させるなどいふ事である。これは單に、喫煙者一個人に

留まる健康上の害であるが、其社會上の害に至つては、随分甚しいといふのは、先づ失火の多くは烟草の火から出るで分る。有名な名古屋の東陽館は、三年かゝつて出来上つた立派な建築だつた相だが、然も巻烟草の吸殻から、三時間の間に烏有になつたといふ話。其他東京でも、哲學館がやけ、獨逸協會が焼けた其源因も多分同じことだつたといふ事だ。自分が喫する爲めに、自分の身體を害するのは、致し方がないとしても、夫が爲めに、此様に社會上に害を來すといふ事になつて見ると頗る考ふべきことであると思ふ。其他に言つて見れば煙草を喫む事は、甚だ不潔だ、次に多くの喫まぬ人に迷惑を感じさせる。殊に馬車の中、電車の中などで、自分が喫んで居つた時は、夫程にも思はなかつたが、さて己めてからには、

甚しく夫が感じられるのである。

次に喫煙は多くの時間を徒費する。喫煙の習慣がつくと、何をするにも、先づ一服といふことになり、一服が一服に留まらないで、二服三服四服五服と無闇にふかし始める。だから仕事の間に一服やつて、夫で精神を刺戟して、考を新らしくするといふことは、一寸困難な話である。

而も之等の害は、多くの代價を要するのである。多い人で月々二十圓、少くつても二三圓は必ず費やす。之程の代價を拂つて迄も、如上の損害を買はうといふのは、考へて見ると、抑分らぬ次第である。

煙草の効能はといふと、醫者の言に依ると、健康の上につきては全く無益有害な計りだとのこと夫かといつて口に別段甘いといふ譯のものではな

い、たい習慣上、口舌、咽喉に當る刺戟が快樂に感ずる様になつた計りだ、煙草をのまないとい手持無沙汰になつて、人と話などするに困るといふけれども、夫は眞の口實ばかり、論より證據、自分は決して、そうは感じないのである。

か様な次第であるから、自分は是非禁煙を勧めたい。勿論多くの喫煙家は、己める事が出来れば己めたいが、どうも、多年の習慣上 己められないといふ。然し、夫は意志の弱いと申すもので自分の經驗に依ると、僅かに二三日の辛抱だ、夫も飯を食はないで居るとは違ふ。煙草を喫みたくなれば、何か仕事をやれば夫で氣が紛れる 二三日こんな風になると、一週間は譯なしに過ぎる、一週間過ぐれば、もう此方のものだ。自分のため社會のため。はた子供のためだ。多くは子供が家

庭で父の喫むのを見る所から始める事になる。

故矢田部博士は有名な喫煙家であつたが、博士の禁煙談は こうだつた『已に克つといふことは亦一の快樂だ、喫みたいのを堪えて 今日も一日過ぎたとなると、何となく愉快だ、僕は此愉快の情を以て、喫煙の快樂に代へて、夫で以て遂に禁煙した、然し、とても、堪へられぬ時は仕方がない茶を嚙むだ事もある』

畫家荒木十畝氏は、先づ鼻から煙を出すことを已めてたい煙を口から吐き出す事にして、漸次己めるに至つたといつて居る。

自分は、だい、無闇に、我慢して、全く禁止し終つた。そうして今では、月に三圓の煙草代は、子供の教育費として 缺かさず、貯蓄してやることにして居る。

年の始めといふと、物を始めるにも都合がよい  
と思つて明治三十七年の始めに於て、此事を喫煙  
される方々にあすゝめするのである。

初春

雨  
峰

(一)

うれしき春の來りたる

今日のよろこびかぎりなし

軒端にうたふ鶯の

聲もたのしくきこゆるは

いくちよろづの大御世を

ことばく淨き音色かや

(二)

いぶせき賤の伏屋にも

ちさき旭の御旗さえ

かといとあねの顔色に

てりさすかげもうつくしく

富士のねは空たかく

白妙の色えめるなり

(三)

門の小川の流さえ

ふしおもしろく歌ふなり

こゝにも春の光あり

新まりたるわが家は

いかに尊き姿ぞや

このしづまりし小村里

(四)

きたれわが友今日の日を

たのしく富士のねのもとに

河の流れのきよきこゝ

群きて遊べわか友よ

男女のけじめなく

うれしく遊べ今日の日を

黒澤登幾子傳補遺(ついで)

下村三四吉

○登幾子が京都に送られし後、牢屋敷役所の白洲にて糾問を受けたるとき次第につきては、

……頃は卯月の十四日、始めて京都御白洲へ召出さる、尤も牢屋敷の御役所なり。白砂の上荒蕪をきたる上に起居らる。彼の座に平伏す。顔を上げよと聲の下、ハツト答へて顔上ぐれば御役所に並居たる御方々七八人、吟味方と見えるは手島敬之介殿、年のころは三十路と覺し

き當りまでの黒羽二重に、紋付上下の着こなしぶり、さすが吟味の役方と撰び出たる吟味の達者、いたわり役と見えけるは加納繁三郎殿、年の比五十路とおぼしき、同じ装束、寛仁大度のりつぱのこつがら、實に博學とぞ見へにける、聞役には鹽津庄藏殿、年のころ四十路あまり、同じ装束、りつぱのこつがら、役所の眞中に坐してもくねんとして物いはず。其外同心の面々には、大河原重藏、平塚兵次郎、上田直之丞殿、其外姓名を覚えざる方々三人づ、筆を取て申述ぶる言を記されける。手島氏の曰く、其方婦人の身として一人にては參るまじ、つれの者は何いにある、有体に申されよ、其方は先達て烏丸扇屋庄七方に宿りて北野の社へ詣で、之れより慶圓坊へ相尋ね、東坊城家へ歌學入門の願を致

し、それより座田右兵衛方へ案内致され、天満宮御遺誠の書を相尋ね、其外歌學入門の願ひを頼み入れ、様々の物語の内に議論など致し候由に承はりしが、歌學の入門とは偽り、實は水戸殿御慎の御儀につき申し開かんそのために、彼の長歌をついで出來りしは、是れ御簾中様の御名代ならん、またつれのものは何くにあるかハイ、左様なものではござりませぬ、いかよふに仰せられても私事は一人にて参りしに相違ござりませぬ。コリヤ其方はな、水戸殿御簾中様よりの御使じやな、シテこの長歌は外につくりしものあるべし、何人にたのまれた、サ、有体に申されよ、申さねばそのまゝにはすまぬぞよ。ハイ何よふに仰せられても、全く以て、一人にて候。恐れながら申し上げます。このたび

私儀婦人の身として上京致し候事一通り申上げ奉らん、哀れ御聞きといけたまはれかし。その子細は、去七月中邦君前の中納言様御慎みの御儀に付きいかなる御答有らせられかゝる罪科には落入れさせたまひしかと存じ、下ながら恐入り奉り、共に慎み居り候處……(中略)……老母と申合せ、恐多くも一天万乗の君の御一大事を承りましては、婦人にて聞捨にはなりがたし、ことに前の中納言様御慎みの御儀も只ならぬ御事と存じ、兩三人に問ひ合せ候へば、全く以て無實の罪に落入れさせたまひし由たしかに承はり候へば、やむことを得ず、上京に決心に相成り、老母の方へ留守居をたのみ、二月十二日國元を發足いたし、道中すがらの艱難苦心言葉にも述べがたく、御推量下されかし。殊

に將軍家御幼年の御事なれば、かゝる無道を行ひたまふは全く井伊様なり、古の太政大臣清盛公の如く、御幼君を立ておき、はしいまゝの行ひをなしたまふかと存じ、さ候へば、將軍様の御身の上も氣づかはしく存じ、誠に御三公(天皇薄主をいふ)の御爲め、天下の御爲め、これまで泰平の御恩徳を蒙り安穩にすぎはひ致し候へば、御報恩の爲めかくまで丹誠をこらし候へども、大海の一滴、九牛が一毛なり、愚婦が誠心哀れ御聞といけたまはらば、我が身一つは何様の御政事を蒙り候とも聊かもいとひ御座なく候と。子細曲に申し述べければ、役所の方々御聞さといけありて、サテ其方は誠に忠臣なるものなり、さりながら恐多くも朝廷の儀は附けたりであらふ、誠は中納言様御慎の御儀を歎き出で來るか

らは、とりもなをさず御簾中様の御使御宮使を致して参りしに相違あるまじ。……(中略)……これは又存じもよらぬ御仰せをさくものかな、恐れ多くも十善天子の御爲め、邦君の御爲め、天下の御爲め、我いやしくも身命のつくだけ申し開かんそのためにはせ上り候と申し上ぐれば、ヲ、其方婦人の身として天下國家の御爲めなど、は古來聞き傳へにもなき事なり、餘りとや恐れ多き御事にはあらずや。ハ、恐多くは存じますれども、我朝にては古來より御例なしと仰あれども、唐にては齊の宣王の時、鍾離春無鹽君などは天下の危きを見ては自から天上へ言上し奉りし例もあり、恐多くも一天万乗の君の御一大事承りましては聞捨てにはなりがたし、易に曰く、其天子は民の父母たり、下民の



王たり、詩に曰く、普天の下王土にあらざるなく、率土の濱王臣にあらざるなしと、我苟くも仁義の道を守り、天罰已に備りますれば、天下の御大事を承りましては聞捨てがたく罷り出で候事若し心得違ひに候は、如何なる御咎を蒙り候ともいとひ御座なく候、……只々天下國家の御爲め、邦君の御慎み御開きになさせられ候は、本懷の至りに候、すみやかに御聞きとていけたまはらば、廣大の御慈悲と奉存上と申上ぐれば……其日の役所は下げられたり。

(此項未完)

○前號正誤 四十頁十四行連合の傍訓は(つれあひ)とあるべし、配偶の意なり、また四十三頁二行(つゝみの庭の道)はつゝみの夜の道の誤

偉人の學校時代(二)

ノーフォルクのチルソン

米 溪

ホレシオ、ネルソン、生れなからにして、活達敏捷、愛憫の情深く、又、高潔なる心性を有せりしかば、卯角相集まりて嬉戯するに當りては、舉措自から、嶄然群を抽けり。彼はエドマンドとカザリンチルソンとの間に生れたる第五男にして實に其の第六子なり。紀元一千七百五十八年ノーフォルクの片田舎の村里、バーンハム、トープに於て生る。父時に、其の地の監督牧師にして、家は即ち、寺院の一舎なりと。

母は、少時は、サックリングと云ひ、其の祖母は、サーロバート・ワルボールの姉なりしかは、チルソンの名も、後に、其の教父の命ずる所にし

て初めは、ロード、ワルボローと呼ばれしなり。

ネルソンの幼時は、餘り強壯ならず、且つ當時イングラントに於て、最も廣く流行せし疾病の一なる、瘡の爲に、大に其の勢力を滅殺せられたるが如し。然れども、其の毅然たる精神と、高潔なる心事は、到底没却し得べきにあらざ、試に、其の經歷を一瞥せよ。勞苦と戦ひ、光譽を望むに際しては、必ずや、直ちに、人をして、其の凡庸に卓越せることを首肯せしむるものならずんばあらざるなり。

其の幼時、祖母の家に寓するや、嘗て、一小童と共に、鳥の巢を涉獵らんが爲に吟行ひぬ。午時既に過ぐるも、ネルソンの姿は認められざるなり。家は残る隅もなく尋ねられしも在らず、一家の驚愕漸く大にして、遂に或は誘巧者の爲に

致されしにあらざやと迄心を痛むるに至りぬ。家より野山の邊迄、人手を分ちて、残らん方もなく索めしが、竟にネルソンが、小河の涯に、渉ること能はざるまゝ、泰然として、獨り座せるを發見せり。伴ひて家に歸るや、祖母は其の顔を見るより、馳せ寄りて曰く「驚くべし、餓を知らずや畏ろしきことあらざりしか、何とて家に歸らざりし」と云へるに「畏れとよ、予は畏れることを知らず。其は抑も、何者ぞや」とは未來の英雄の平然たる答なりき。

ネルソン最初、其の居村の小なる學校に送られしが、閑暇ある毎に、市場に於て、彼の姿は見られぬ。而して、彼は遂に、ナイフを以て、一の小船を造り、紙帆を装ひぬ。此に於てか、更にポンプを以て働き初め、其の小さき學友の助けにより充

分船を浮ぶべきだけの一池を成し、其の技巧によりてなりたる船を浮べ、以て樂みとしたり。其の愛憫の情深きことは、既に此の少年時代に於て、偶然の事によりて示されぬ。ダウンハムの靴工の家に、一匹の小羊を飼ひて、非常に鍾愛し常に之を、其の店頭に居らしめしが、偶々、チルソン思はずも、其の入口の戸を開かんとして、之を其の柱との間に挟みしが、悲鳴に驚きて、直ちに放ちしも、此の時の、小羊に與へし苦痛に付ては、心中、堪へ難ら悲みをなしてより暫時は其の情の忘るゝこと能はざりしと云ふ。幾千の將士をして命を捧げ、死して悔なからしむるもの、實に此の心に存するにあらざるか。

チルソン次で、其の兄ウキリアムと共に、ノースワルシヤムの學校に送らるゝや、其の剛膽廉潔

の資性は、端なくも、此に發露したり。當時、其の校長の庭園には、褐色の、玉を懸けたらんか如き梨の實の熟するあり。少年等は、其の上級生の言に徴して、當然、自己等の獲物と思惟したりしと雖とも、少年中、豪膽を以て稱せらるゝものも尙は、疑懼して、敢て剽掠を擅まゝにする能はざりき。

チルソン是に於てか、夜、其の被衾によりて、身を寢室の窓より投下し、遂に其の菓を掠めぬ。然れども、彼の木の實と共に、其の室内に曳き上げらるゝや、得る所を以て、盡く之を其の學友の間に分配し、少しも自から殘す所なく、人の其の所以を聞くものあれば、徐ろに答へて曰く、我は唯、之を取りしのみ、然らざれば、彼等は畏懼して、到底手を下すこと能はさればなりき。

チルソンの母は、一千七百六十七年、八人の孤  
兒を残して逝きぬ。此に於てか、其の弟當時海  
軍士官たりし、モークリス、サックリングは寡夫  
の家を吊して、其の遺子の一人は、自から之を訓  
育せんことを約したり。

其の後三年、チルソン時に年十二、クリスマス  
の祭日を以て家に在るや、彼は其の地方の新聞紙  
を讀みて、其の叔父の、砲六十四門を有せる、  
レイズナブル艦の乗組を命ぜられしことを知りぬ  
是に於てか、彼よりは一歳半の長兄、ウキリアム  
に迫りて曰く、「請ふ我が爲に家父に書を送り、予  
が海上生活を好むを以て、行て、叔父の下に在  
らんと欲するの意を告げよと。

父時にベースに在り。情狀最も窮迫を極めし  
が、チルソンの提議を見て、其の眞意の有る所は

事ろ、其の境遇を察して自から事に従ひ、以て父  
を助けんとの冀望に出でしを知り、敢て其の決意  
に逆はず。蓋し、其は深く、其の子の性格を知了  
したりしなり、其の生平人に語るや、曰く、此の  
兒夫れ大事をなさん其の位置に従て事に當り、恐  
くは攀ぢて樹梢に及はんとすと。

之によりて、サックリングは、遂に返翰を載し  
ぬ、「兄弟の中、尤も虚弱なるボレシヤが、家を離  
れて、荒き海上に、身を處かんとするは、柳も何  
なる事ぞや。好し、兎に角も來らしめよ。先づ其  
に、吾人の動作を試みべし。砲丸は、彼をして、  
其の考を廢て、直ちに、心に備ふる所あらしむ  
るを得んか」と。

チルソン等の、ノースワルシヤムの學校に歸る  
や、間もなく、春寒峭嶺、濃霧尙は四境を罩むる

朝未明に、家僕の、父の消息を齎らし來るに會ふ之れ乃ち、ネルソンが期待せる所の、叔父と共に、其の艦に乘込ひべしとの音信なりしなり。

然りと雖とも、ネルソン、今や、一方に於ては長くその研鑽の窓を共にせし、其の兄、ウキリアムと別れざるべからざるなり。身未だ漸く弱冠ならで、前途の事亦茫洋知るべからず。幾年相擁して、常棣樂を同らせしものも、明日よりは、千里漂浪、一言相問はんとするも、烟波空しく恨を寄せんとす。其の去らんと欲して、互に相顧みるに當りてや、胸中果して、奈何の情をかなしけん。ネルソンは倫敦迄は、其の父と同行せしか、此の時に當り、レイゾナブル、碇泊して、メドウエイに在り、而してネルソンは、獨りチエサムの棧橋に置かれしか、到着するや、先づ他の旅客等と共に

に座せしも、尙ほ、前途の方法を考究せんとして其處を立ち出で、遂に、船に達し得べしにもあらざるも、身を切るが如き海風に晒されつゝ、彷徨すること幾時、一士官、忽ち、其の少年の寄る邊なく吟行する様を注視し、彼に其の來歴を問ひしが、計らするも、之れ叔父の知人なりしかば携へられて其の家に至り、休息することを得たり。其の後遂に、目的の艦に乗り込むを得しと雖とも、便りとせるサックリングは、折しも艦内にあらず滿艦一人の情を寄する知人もなし。此に於てか、彼は遂に詮方もなく、誰顧みるものもなき内に、其の日は、終日甲板に於て徐かに歩み暮したりしか、翌朝迄は、遂に彼を愛憫せよ、との言は聞かれざりき、サウセー、此の時の情を説明して曰く「吾人の初めて、遠く天外の異域を指すに當りて

や、其の情に感ずる所、果して如何。悲涼凄愴、  
 恰も、生氣充分満ちたる樹枝を、其の母幹より裂  
 くが如く、全生涯に於て、忍ぶべからざるもの、  
 内に、最も辛刻、情を痛ましむるものにあらざら  
 んや。

温かなる恩愛の名残、尋ねるに由なく、慈親の  
 笑顔、遂に仰ぐべからず、兄妹の友愛、掬せんと  
 欲して獨り自から吊するが如きに至りては、四邊  
 の境遇昔日と選を異にし、胸中感ずる所唯蕭々、  
 悲歌耳に在りて郷天迥に望むべからず、心裡の荒  
 寥消磨、難くして、胸中の悶々深く腦底に彫られ  
 神喪し、氣沮み、遂に其の情を毀傷したる者、亦少  
 々にあらざるなり。蓋し、其の家郷の天を出つる  
 に當りては、生涯の運命を擧げて河流の中に投入  
 するが如きの感をなすを以てにあらざとせんや。

況んや、生を碧海波濤の間に托するに當りては、  
 身は筋骨を勞して安慰なく、靜に体を横へて華胥  
 の樂を擅にするたに能はざるに於てをや。

チルソン今や、虛弱なる一身を提げ愛に充ちた  
 る心を抱て、此の間に投ず、生涯遂に、忘る能は  
 ざりしものは、乃ち此の當初の困苦にあらざらん  
 や。其の生涯と、幼時に付ては、チルソン自身の  
 記述あり、曰く、

予は紀元千七百五十八年九月二十九日、故家に  
 生れしが、初めノーウイツチの高等學校に送られ  
 後ノースウエーイに移りぬ。其の後、フオルグラ  
 ンド島問題起りて、スパーインと難を構ふるや、  
 予は、當時、叔父、砲六十四門を有せる、レイゾ  
 ナブル艦の乗組マウライス、サックリングにより  
 て海上に事に従ひしが西班牙に對する準備として

ヒツパート、バーリノアホートンの西印度船乗組となりて、ジオン、レースポーン君と共に差遣せられぬ。レースポーンは以前、サツクリングと共に、職を海軍に奉じたる人なり。

航海功を終へて、チエーサムに凱旋せしは、正に千七百七十二年七月なりき。若し夫れ、予をして進歩せる教育なからしめんか、艦隊に軍職を奉ずることの畏懼より轉して、通常の航海者となり、前の有力家、後の篤行家たりとの傳説を残して、一の航海者を以て終りしやも、亦知るべからざるなり。云々。

イギリス史、否、寧ろ、世界史上卓然たる一英雄、ネルソン生涯の立脚地は、斯の如くなり。

其の偉蹟と光榮に至りては、之を筆にすれば、

光彩餘りありて、却て其の實を傷けずんばあらず。ナルソンの近くや、舉國吊するに國民の不幸を以てし、哀悼至らざるなかりき。而して、サウセー獨り謂へらく、「彼は決して天折せりと云ふべからず。彼の死、豈痛哭すべきものならんや。大効既に成りて、偉勳人心を照す、以て悔なかるべく、光榮至らざるなく、聲譽世を動かす、何の悲むべきものか之れあらん」と、之れ、其の眞の偉人を評せる至言にあらずや

## 新 光

雨 峰

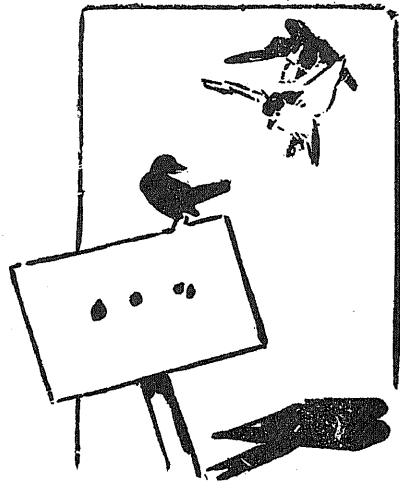
時のながれ  
限り知られず  
遠く遠く  
歴史の塚に  
消えてゆくか  
過去の過去には

黒きとばり  
 あとも見えす  
 さはれ今ぞ  
 巖戸ひらけ  
 天地ともに  
 温かき血  
 冷えし人ら  
 人の齡  
 消ゆるとても  
 かへつてちかし  
 一輪一羽  
 色とこわね  
 榮をきそふ  
 活ける世をは  
 空の雲も  
 十重に二十重に  
 闇ぞ横たふ  
 蘇かへりにける  
 光り閃きて  
 呼吸ぞ新らし  
 胸にぞ湧きて  
 活ける如し  
 永き過去に  
 望ある岸  
 今の時こそ  
 花さき鳥なく  
 出づる旭と  
 尊くゆかし  
 とほくとてか  
 海の波も



平和らけく  
 うたへようたへよ春の光りの  
 めくみふかき  
 かきりあらぬ  
 一つになりぬ  
 妙なるちから  
 今日のめくみを





# 幼稚園の遊戯(その一)

松村ひさ

千九百九十八年にアメリカで出版された「幼稚園の原理と實際」(Kindergarten Principle and Practice)といふ書は、幼稚園に従事する者にとりては誠に有益なものでございますが、其中には

保母の技術と天職——自然研究——表號主義(幼稚園の唱歌及遊戯に於ける表號主義の利用)

愛國心の教授——フレーベル氏の母の遊戯  
道徳的訓練——幼稚園の遊戯——再び遊戯  
に就て——婦人にとりての生活の學校としての幼稚園、

などの題目が掲げられて居ります。之を一々詳しく原文の意味通りに爰に記述する事は逆も私の力に及びませんから、ホシノ處々特に私の感じた處とか先輩から指示された處とかをぬき出しまして之に私の考やら説明やらを加へ、少しづつ書き載せる事に致しませうと思ひます。

今日の處は幼稚園の遊戯といふ處に付てゝござります。一寸御断りいたして置きますが以下此書と申せば右「幼稚園の原理及實際」の事、著者と申せば此書の著者といふ事にいたします。

(I) フレーベル氏の教育主義の内で何處が一番貴い

か

あまり澤山の寶石を見ると、どれもこれも皆一番美はしいと思ふやうに、フレーベル氏の教育主義を見ると何處が最も貴いか分らぬ程に何處もかも貴い。併し大胆に自分の考を言ふと、フレーベル氏の理論に含まれて居る眞理の中で、遊戲に付ての事は最も貴いといふ事が明かに見える。

右の様に著者は言うて居られます。遊戲は子供の生命であり、幼稚園は子供を集めて教育する處である以上、幼稚園教育に従事する者にとつて、遊戲といふ問題は極めて大きな研究すべき事柄でございます。

2) 子供部屋はフレーベル氏の大學で小さな子供は其教授であつた

とございますが、誠に之は万代不易の事柄なので、

六十二

子供を一人だけ目の前に置いていさへも、其子供のする事爲す事言ふ事などから種々の事を大人は學ぶ事ができますのに、まして大勢の子供、それが皆十人十色で、違つた家庭に生れ違つた遺傳をもち違つた境遇で教育されて居るのを、毎日目前に並べて見て居る幼稚園の先生達は、實に一方から言へば時々刻々子供から種々の事を教はつて居る様なものでございます。子供はそれ／＼の心情から様々の事を考へる、言ふ、行ふ、遊ぶ、保母は之を見物して居るのであつて、子供は常に、私は此通りの兒でございす、かく／＼の教育はかやう／＼の結果を來します、あなたのあの教育法は私をこういふ風にしました、あなたの欠點はこれの通り、子供といふものはこんなものでございす。など、保母に向て様々の心理學や教育

上の事を示して居るものでございます。誠に昔子供部屋がフレーベル氏の大學であつた如く、幼稚園は實に吾々保母の教室で毎日登園する子供は吾々の教師でございます。此活きた教室で毎日學ぶ權利と義務ある私共は、子供といふものを深く觀察研究して如何に之を教育すべきかといふ事を絶えず考へて行かねばなりません。遊戲だけに付て申せば、まづ何故に子供は遊ぶか、何を子供は遊ぶか、如何に子供は遊ぶか、といふ様な極必要な緒の問題からとらへはじめて、實際の子供に付て考へるといふ事は是非せねばならぬ事であると存じます。

### (3) 唱歌遊戲の根源はどうであるか

之は遊んで居る子供を見て居ると分るので、彼等の言語は自ら唱歌となつて居り、彼等の自然の動

作は即ち遊戲をなして居る。遊戲の土臺は子供の自發活動といふ事の上に置かねばならぬ。と著者は言うて居られますが、實に幼稚園の遊戲といふものは申すまでもなく保母の爲の遊戲ではなくて子供の爲の遊戲でございますから、保母が新しく一の遊戲を案出したといふ様な場合にでも、十分子供の方になりて、詳しく申すと、保母自身が子供に身を置き子供になつて見て、さて、之でよいかどうかといふ風に考へて、いよくといふ處で採用する事が必要でございます。大人である保母が獨りで考へて、之でよいとか、きれいなとか、おもしろいとか喜んで、セッセと子供に其通り教へ込んで、其子供のするのを見て満足して居る様な事がもしありましたならば、之は保母の爲の遊戲とも申すべきものになります。眞に子供の爲め

なる遊戯とするには絶えず其土臺を子供の上に据え置く事が必要でございます。即ち、之は子供の自然に適合して居るか、之は子供の爲に眞に教育的であるか、之は子供にこういう風にしてよいものであるか、之は子供にとりてどういふ利害得失があるかといふ風に、少しも子供を離れずに考へねばなりません。たとへば大人でも中々解せられぬ様な雅言でできた唱歌に六かしい身振をつけた遊戯を子供にさせた事も、我國で幼稚園のはじまつた頃にはあつたやうでございますが、之等は當然遊戯の土臺を子供の上に置かなかつた誤りからでございます。近年こういう事が段々減じて参りますのは誠に喜ばしい事でございますが、なほ進で遊戯を眞に子供の爲になる完全なものに近づけたいではございませんか。

#### (4) 唱歌遊戯の分類

此書では幼稚園の唱歌遊戯を分類して、家族に關するもの、商工業に關するもの、五官に關するもの、天然の生物に關するもの、自然現象に關するもの、恩物作業に關するもの、体操、舞踏、進行、作法、祈禱と讚美歌、日月星等に關するもの、即ち席の遊、其日の面白い事の戯曲、など、分類して居ります。之、最も完全な種類別ではないとした處が、保姆が自分の始終子供にさせて居る遊戯を試みに此分類に由りて別けて見るなり、又は進んで自分で新たな別け方をして見たりするのは有益な事であると思ひます。あれもよい、之も子供が喜ぶと何心なくいろ／＼用ひて居る間には、何時の間にか、或方面に偏して居つて、たとへば動植物に付ての唱歌や遊戯は澤山あつても家族的

のものや商工業的のものが足らぬなどいふ様な事がございますかも知れませんが。とにかく時々立ちかへつて、自分はどうな類のものを常に用ひて居るのであるかといふ事を省るのは必要な事であらうと存じます

## 子供の性行

林 壽 祐

子供の性行は予輩青年の素よりよく研究すべきものに非ざるも予輩が幾多の子供に接し偶然観察し得たことを試に少しく集めたのです

▲子供の生れた當時は、唯乳汁をのみと、眠ると、糞尿を排出すると、啼くのであるが、少しく手足の利く様になると、睡眠の外或は玩具をいぢつたり、或はテクテクと歩き廻つたり、或は他の者に戯れたりして、一時も静にして居らない。これ體量増進の際であるから、遊動はよく食物消化

との平均をとるのです、小供には運動は特に必要であります。

▲總て己を愛する者を好むは、人間の通性であるが、特に子供にあつては顯著である、母親は如何なる者よりも、最も懇切に子供を愛するから、子供は母親でなければ、夜も明けぬといふ程で、慈悲深き観音様の如く、貴く思つてゐるのです。けれども祖母或は乳母が、熱心に愛撫してやると、眞の母親より却つて祖母或は乳母を好くのがある子供は普通父親より、母親に懐くのですが、繼母であると、奇体に父親を慕ふのです。愛の厚薄によつて好慕に變動あるは人情とみえます。

▲子供は嚴重に育つべきか、將また氣隨氣儘に育つべきか、何れにしても一利一害があります。嚴重は健全なる子供には結構であるが、纖弱なる子

供は爲めに精神が委縮して、動もすれば怖氣を來たし、物の役にたゝなくなつてしまふ。それから放任主義にすると、子供は我儘が増長して、いつでも無理を通うとする、で暴は益々暴、愚は益々愚になつてしまふ、けれども穎敏伶俐なる子供であると、成長するに随ひ是非善惡を辨へ、縦令父母兄弟の訓誨なくも、一人前の立派な人間となるのです。譬へば庭木などは、小さい時から、幹を曲げ枝を伸ばし芽を挫きなどして世話をすると、奇態に變育して、大に觀賞されるにいたるが、或る木はセツカンに堪へられないで、途中で枯損してしまふ、之に反し植木屋の手にかけず、氣儘に成長させると、雅もなく趣もなく、唯ノツンリと突立ッてるばかりであらうが、或木は大幹となるに随ひ、自然の枝振を現はし、却ッて幽雅な姿

になるのです。

要するに子供を養育するのは、其體格の健否、其性質の穎鈍に鑑みて一々斟酌し、嚴に過ぎず緩に失せず、能く其中庸をとり、臨機應變の所置を施すのが、肝要であらうと思はれます。

▲子供は負はうとすれば、抱からうとする癖があつて、甘い聲をかけると、つけあがつて仕方がないのである、で餘り馴れ親むと、權者といへども馬鹿にして巫山戯かゝり、果ては戯談にも惡口を放ちて來るのがあります、故に子供には時々威嚴を示さねばならない。

小供を放任主義に育てると、鷹揚でよいが、人の前でも不行儀なことをして、母親の面皮をかくことがある、又來客に失禮をして、感情を害することもあります。

▲子供の中には、來客でもあると、母親の小事のないのにつけ込み、金銭を請ツたり食品を乞ふたりするのがある、又平常餘り嚴格にして居る家の子供は、客間に來り、家人の立去る隙を狙らひ、急ぎながら客の前に供えてある茶菓子をつまみとり潜に逃げ匿れるのが往々あるのです、客の方ではこらこら取るのでないと制する譯にもゆかず、さりとて家人の居らぬ間に、さき卑しさをした様に思はれ、甚だ迷惑である。これ家庭教育の不完全な爲め、子供の了見が自然と鄙しくなつたのである。

▲「子供は正直」といつて、善性悪性にかゝはらず六七歳頃までは。多くは天真爛漫で、虚偽をいはないが、不良の輩は、八九歳の頃から往々虚言をいつたり、飾言を呈したり。或は人の物を盗みとつた

りする。就中女子は早くも先天的の嫉妬を發し、頗る憎愛に注意し、所謂陰日向裏表があつて、上長權者に媚び、朋輩を讒誣し、其賤しむべき怯性は、尋常小學校時代から高等女學校時代までも、多くは増進するのです。

▲子供がわるいことをしたら、叱責するのみでなく、後で慰め勵ますといふことは最も必要であります。例へば學校の試験に落第した時など、馬鹿め畜生め意氣地なしめ、何所へでも出ていきやがれと、頭から怒鳴り騒ぐと、子供は失望と恐怖の爲め、了見が變になつて、益々愚物に陥つてしまふ、所が一度は叱責しても、後から同情を表し、懇々と獎勵慰撫すると、却つて興奮劑となつて、好結果を得ることになるのです。

▲十歳前後の子供は概ね頑是なくて、主従の輕重

をしらず、主客の分別を悟らないから、子守の分  
で主人の少嬢と權利を争ひ、食客の境遇で、置主  
の幼兒を抑制するなど、憎くむべき程の罪科はな  
いのです。

▲子供は賞めるを喜び、けなすとじれるから、平  
常善いことをしたら、充分褒めはやすとだん／＼  
と善い事をして來るのです、で使ふのにも、何々  
を持ツて來いとか、何々をしろツとか、命令的に  
いふよりは、寧ろ、惻口だから何々を持ツて來て  
呉れとか、感心な子だから屹度何々をするよと賞  
めながら使ふと、大義がらずに、嬉し喜んで用を  
たすのです。

▲無學なる父母も、子供からみれば、萬能の博士  
の如く思はれ、新に出會したことは、直にこれを  
父母に質問し、出來得る限りは其疑念をはらさん

とするの癖があります。父母は實際子供の教員で  
ある、朋友である。宣教師である、司法官である  
行政、官である、軍人であるのです。

▲子供は物を真似るの性がある、例へば演習があ  
ると、何れの小兒も活潑となつて、竹刀を携へ、  
喇叭を吹きなどして、軍隊の真似をし、祭禮があ  
ると其當時は南瓜などに棒を貫き、神輿に擬して  
擔さ廻はり、芝居があると動もすれば假聲を使  
て家人を笑はし、其他角力にても流行謠にても、  
見聞して感じたものは、悉く其真似を試みるので  
ある、孟母の三遷は、此性を示した好例でありま  
す。

▲故に小供をして良風美習に養成しやうとならば  
幼年時代の朋友を、最もよく撰擇せねばならぬ。  
善惡何れかといふに、大概悪い方に染まり易いの



です、近頃學事獎勵の結果、下流社會の子供が著るく學校に通ふて來た、で良家の兒女は日々これら家庭のよろしからざる數多の生徒と遊ぶので、不知不識の間に不良の實行に感化され、従前に比しては、大に兒女の品位を落して來た様であります、人情からみると貴族の子弟と貧業者の子弟と同窓に學ばせるのは、誠に感服しられない、貴族の學校は何うしても別に設置しなければならんかと思はれるのです。

▲子供の最も愛らしいのは、少しく辨別がついて笑はれる頃から、漸く言語を發し得る頃である。で五六歳までは、猶言語舉動に愛すべき所があるが『セツハツの憎まれ盛り』といつて、七八歳の頃は辯は充分たち、手足は充分利き、そうして未だ遠慮會釋といふことを知らない故、好んで人に

擲擲ひ、惡戯をなし、動もすれば惡口を放つので人に嫌がられるのです、女子は十二歳の頃からやゝ遠慮といふことを覚え、十四五歳の頃は一變して頗る謹慎となり。十七八歳よりは、發情期と共に大に愧氣を催ふし、些々たる言語にさへ、顔を赤らめるのであります。年頃になつて人中で餘りシャ―シャしてゐるのは、女子に取りて趣といふものが一更ない様に思はれます(終)

## 二四戲會

楠 田 睦

私が田舎を出て丁度四年計り東京で諸姐の御厄介に成て居ります内に種々面白き御話等澤山に承りましたが、此二四戲會程滑稽で併も眞面目で面白き話は且て聞た事が御座ひません、尤交際が狭

かつた故でも御座りましよふが、斯申升と只今は至て交際が廣ひよふに聞へますがそゝ云ふ事情でも有りません、ツマリ社會が違つて居た勢で御座りましよふ、兎に角此様な不思議な事は世に多は無かるうと思ひ升 諸姐達何卒私の爲め否々二四戲會の爲めに貴重な時間を五分乃至十分間を特に御高覽の爲め御費し下さる様に願ひ升、偕て物の附合すると云ふは不思議な結果を來たすもので御座り升 去る二月四日に東山の平野やで藤澤文治郎氏「京都の木版印刷業者」が催された懸賞圖案の審査を囑託された連中は 金子錦二、西行菴小文、龜屋良則、島田彌一郎、村上文芽、若狹屋元茂、神坂雪佳、小西大東氏の八人で御座りました、ソモゝ不思議の初まりは此二月四日と云ふのに在り升即ち二四ヶ八又八を二分して四

と云ふ數の是等にも心を止めて頂きたひと思ひ升此八人の内の長年者が金子錦二氏で又少年者が小西大東氏で、ソシテ可笑しひ事には 此年長者がどろ／＼しき髯男で又年少者の小西氏が彫刻高雅なる古代模様の菊石「東京でアバタ」で御座り升しか而して中に挟まれた六人の内 西行菴、村上龜屋の三氏は古式の方で小西氏と同じ………の方で御座りました而して島田、若狹屋、神坂の三氏は金子氏の方で髯でした斯の如く八人の内の四人が髯で四人が菊石で在りましたが殊に可笑しかつたのは髯の四人が洋服、菊石の四人が和服で御座りました。で、どうも不思議と云ふので、其年を加添へて見ましたらば、菊石四人の年の積が百六十五で又髯四人の年の積も矢張り百六十五でしたハ、面妖な此は奇だ、妙だ、變だ、れつだと、異

口同音に謂れたが、こんな妙な會合は又と無いから紀念として一ツ會を造るゝ殊に二月四日と云ふも尙更不思議だと云ふ處から、二四戲會と云ふ一ツの會を組織せられましたが其二回の會合を去る十一月十日に東山の西行菴で開れましたが装り附から調理まで悉皆、其面相に縁で居ました其趣向は夜話の茶の湯で 其道具及菓子料理の事も申上り 燭臺が菊燈夫れに燈心を長く垂れて髻に準へてして床に掛けて在る軸は石川丈山の筆で「氷消へては浪古苔の髻を洗ふ」と云ふ句で御座いました 而して茶釜はアバタ準へ霰釜と云ふのを用ひ茶碗もアバタに準へ（栗田焼）代へ茶碗の銘は翁で染附の刷目之は髻に準へたのです 茶杓が胡摩竹干杓が關羽と云ふ銘で 水滴が古備前（美髯）取菓子私が爲めと云ふ銘で 薄種に拂子の烙印を

をしたもので 夫れに一首の歌が添へて在りました 蒸菓子 銘がかもかげと云ふので 鶏卵焼の皮に柚アンを入れたものでした 之にも歌が有りましたが是は後にいつしよにして御覽に入升 而してお茶があまり結構なので亭主役の西行菴に茶の銘を尋られましたら 亭主は左様此の茶の銘は菊石と云ふので御座り升と答へられました之も一寸座輿で中々面白らう御座いました 而して茶は終りて酒宴に移りました 先づ折敷膳に椀高と云ふこしらへで お膳の蒔繪が光淋の菊で 吸物椀が刷目で其中の料理は 海老の髻吸物を雑炊仕立にして ウル餅が入れて有りました 之も髻とアバタのこしらへで有り升 而して小皿が簾豆腐に蓼にからすみ 椀高の中の餅が鶏卵焼、海老、小巻餅の白髪焼、而して刺身が石ガレイの菊菜あへ

夫れに髯大根を、あしらひにしたる物。斯の如く萬事に心を盡しての小集りでした既に酒宴も爛ならんとする頃に、何れの何人か此會を聞き知りて髯籠の中に袖を入れて見舞に贈られました。而して餘興には名々の得意の技術を奮ふに歌詩句や畫を以てし、アバタ連は髯の惡口を書さ又髯の連中も之と同様で、此夜は更るまで斯の如く愉快に、過されましたが、此會に於て特筆せねばならぬ事は、斯の如き寧滑稽的の會にも係らず、此席上の雜話から京菓子發達のはかる爲めに來春を期して菓子の相撲を興行しよう云ふ事を決議して而して此開催には又此二四戲會の連中が幹旋の勞を取らうと定められた事です。又此菓子相撲の結果や二四戲會に面白き話が御座ひましたらば早速に此雜誌を借りて諸姐に御話申上たひと存じ

七十二  
升兎に角此様な、一時の戲會が爾かく實業に貢獻するよふに成つたのは誠に喜ばしい事であると存じ諸姐に御話し申上

髯の菓子に添へて 若狹屋元茂

夜をこめていざや遊ばんおもふとち

うき世のちりをかき拂ひつゝ

おもかげと云ふ蒸菓子添へて

君がよはかきりもしらぬながつきに

にはへる菊や千代のおもかげ

同しまどひの席にて 金子 錦二

さゝれ石に似たるあばたの人々を

あつめて髯の長き君か代

痘痕者髯者よりなれる二四戲會に

河瀬 芳

いものあるかははさずから菊の花

すゝきのことに髻にまじりて

同しく情歌

僮丹　董

今宵くまるゝおもひの底を

袖にゑくばの數つゝむ

探紅葉

小西　大東

露しもはふもとよりげに繁からし

とめさし山のかひのもみぢば

千もとの菊を植たひける人に贈るとて

仙人のめづてふ花をうつし植て

ちよをかそふるませのうち哉

此の會の八人の内には畫の大家が居られ面白き畫

も出來ましたが之は此次に致し升

# 忙中閑語

其　子

▲年は新になりぬ。さらば年と共に吾等の生活を  
も新にせんか。昔者、支那の賢哲、日々になれ  
と教へぬ。近くはカーチギーといふ人、一日毎に  
己を改新する人にあらずんば、共に爲すに足ら  
ずと誡めぬ。日毎に新ならんこと、吾等凡人に取  
りては、誠に困難なりとするも、希くは年毎にだ  
に新ならば、吾が望は足りぬべし。

▲不言實行といふこと、男子に取りても、もとより  
ながら、女子には殊更必要の言葉なりかし。半熟  
の教育を受けたる人、生嚙りの智識ある人は、時  
としては、多言不行に陥り易し。かゝる女子は、  
人の妻となりては、顎もて人を指圖する許り、自  
ら手を下して家政の事に當らんとはせず、たゞ賢

こぶりで理屈のみを弁ふる不經濟の主婦なり、女學校出の嫁入口少なりしは、主に之に原因したるものとぞ知られし。

▲言ふこと、強ちあしとにあらす、たい行はずして言ふことのみをする謹しむべし。先づ行ふことを力めよ。兎角は我國、言の人多くして行の人少きか如し。家庭に於ても、學校に於ても、子供の教育には、特に此點に心せんこと別して必要なり

▲支那にては、少言沈黙最妙といひ、西洋にては語るは銀、黙るは金 Roden ist Silber, Schweigen ist Goldと言ふ、共に不言實行を意味するなり

▲男子にて獨身生活の樂を語る人多し。げにや、獨立獨歩、俯仰自由なること、獨身生活の如きはあらじ。たい老年、幾星霜を経たる後始めて其生活の餘りに寂寥に、餘りに單純なりしことを感ず

るに至るべし。

本篇もと、題して家庭閑話といひ、その子といふ名の下に、家庭に關するくさくを論じもし評しもせりしが、本號よりは題も改めて忙中閑語とし、名前も其子と改め侍り、因に、その子は實名にはあらず、若し實名その子といふ人御座さんとも、そは本篇のその子其子とは全く關はる所なきことを、附け加へ置く。

## 雜 報

### 編輯局より

▲新年の御吉慶千里同風、先づは目出度申納め候まこと、歳月は流るゝが如く、何かと申す中に、本誌も、こゝに滿三歳の齡を重ね候、お蔭により

何の障りもなしに、生長は致し候ものゝ、免角、目覺ましき發達進歩も致し兼ね候事、顧みて、忤怩たらざるを得ず、何れは、讀者諸媛の御協力を以て大に活躍致したくと存じ候。

▲就きては、本年第一號よりは、多少の體裁を改め候。ほんの目前の事に候へども、餘りに舊態の儘なるも如何と、年の改まると共に、かくは致し候。従つて、材料の選擇と排列にも意を用ゐて、多少拾拾致し候、彙報欄の如き、必要は必要に候へども、從來、本誌に限らず、何れの雜誌も、多くは新聞紙の再録に過ぎず候故、本誌よりは、特に際立ちて、之はと申す程のものでなくては、掲載致さざる積りに御座候。

▲次號に於ける分の豫告し得べきものは、凡そ左の如くに候

家庭生活と教育……………安井 哲子

怒の情……………松本孝次郎

玩具に付して……………松村 久子

懇和會……………田中 文子

黒澤登幾子傳……………下村三四吉

幼稚園案内……………東 基吉

割烹十二ヶ月……………石井泰次郎

包厨探險……………や、て

其他に金玉の文字、錦鏤に加ふるに花を以てすべく、眞に我國、家庭教育、女子教育の伴侶たることを期すべくと存じ候 敬具

●日本女子と蒙古王の家庭教師 清國の女子教

育漸く萌芽を生ずると共に、女教師を我邦に聘する者多きは、最も喜ぶべき現象なるが、今や彼の

賢明有爲を以て聞えたる蒙古喀拉沁王の如きも、亦其家庭教師として、本邦女子を招聘したり、其人を誰とか爲す、即ち河原操子女史是なり、女史は信州松本の人にして、其父は福島少將とも、懇意の間柄と聞えしが、女史は初め女子高等師範學校に學び、三年級にして病の爲に退學し、其後は下田歌子女史に従學しけり、業成りて横濱の大同學校に聘せられ、支那人の女生徒を教授し居けるが、昨年五月と云ふに、其師下田女史の推薦に因り、清國上海の城内に設けられし、務本女學堂の教師と爲りて渡清しつ、時に年二十五にして、才貌雙絶の女史は、勇氣さへ尋常女流に越えて男々しく、上海着後は日本旅館にだに入らずして、直に學堂に關係ある支那人の家に止宿し、一週間ばかりにして、遂に城内の同學堂内に移り住みて、

熱心に教鞭を執れり、當時は惡疫流行して、殊に不潔を極めたる城内には、一日百餘の棺桶を出すに際して、年尙少き女子の平然として其職に盡せるは、鬚眉の徒にも得易からざるなるべし、斯くて一年の約束なりければ、今年五月にて満期と爲らんとせし折節、喀拉沁王より女教師聘請のことを北京なる日本公使に託せるより、公使は上海なる小田切總領事に照會ありて、總領事は女史に相談せしに、女史は快然として之を諾せるにぞ、總領事も其健氣なるに驚服せりとかや、左もあるべし清國內にても、開港場附近ならば兎も角も、北邊路遠く塞外雲迷ひて天飛ぶ鴈の音にのみ聞く蒙古の地に、年少く眉目麗はしき女子の、其天職の爲に勇往せんとするを聞きては、誰が其勇と誠に驚き且服せざらんや、女子は其後三箇月許の間は



彼の電奏事件に有名なりし經元瑠氏の宅に寓して支那語を研究しつゝ、喀拉沁王より使者來るを待ち去月二十三日迎接の蒙古官吏と共に、上海を發して北行の途に就けりと云ふ（大阪毎日）

●高等女學校に幼稚園を附設せしむる建議 客  
冬開會せられし高等教育會議に於て、遺憾にも非決せられしとはいへ、一議員によりて、本題の提出を見たり、時勢は漸く幼稚園の必要を認むるに至りたるか如し。

### 建議案第九

高等女學校に幼稚園を附設せしむること但止むを得ざる事情ある時は文部大臣の許可を受けて附設せざるを得しむること

### 理由

高等女學校の生徒は他日中等以上の家庭にあつて兒童教養の任

を負ふべきものなれば兒童保育に關する知識を有すること特に必要なり故に高等女學校に於て現に保育法を教授しつゝ、あり盛るに保育は元と一の技術なれば單に保育に關する知識を授くるのみにては充分と云ふべからず更に實地に就て保育の方法に習熟せしめざるべからず高等女學校に幼稚園を附設し高等女學校生徒をして保育の方法を實習せしめんとする所以なり

提出者 溝淵進 駒

賛成者 伊藤貞勝 森本清藏 篠田利英

### ●男女交際論 先月の六合雜誌に、男女の交際

と題して、左の如く見えたり

男女の交際を盛んならしむるとが、一には結婚難を解き、二には青年の不品行を矯正し、三には女子の思想を發達せしむる等様々の利益あるとは云ふまでもない然るに進んで青年男女を交際せしむるの中心となる先輩のないのは何故ぞ。

男女の交際を西洋の如く盛んならしむべしとの論は随分古くからある論で、中頃消へて居つたが、近頃又喧ましく叫ばれて來た、が相變らず叫ぶのみで、コレが實行の責任を負ふものがない、コレ何故ぞ。

一口に云ふと世間が恐ろしく、世間の口がウルサイからである。外の事とは違ひ、事女に關するとなると、日本の社會は極めて邪

推し、極めて氣を廻はし、又極めて惡口をたたくから、心には思ひながら何人も此の男女交際の獎勵と云ふには、指をよう染めないものである。

而し何事でも世間に誤解さるゝのを厭ふては出来ぬワケで、獨り此の事のみでないから、吾人は勇氣ある先輩中より、世の誤解を覺悟しつゝ若かき男女の交際獎勵の任に當る人の出でんとを切望する。

若かき男女の間には若し正交なくんば必ず醜交あるべきものなり

## 兵庫縣通信

在攝津 通信員 平 岩 洋 洋

●尼崎婦人會 は慈善、教育、婦德等の修養の

目的を以て一昨々年尼崎町の有志者が組織したるものにして、先般舊藩主の別家櫻井忠剛氏の同町に移轉せしより、夫人豐子を會長に推したるところ、其後會員も増加し益事業を擴張するにより現在の尼崎幼稚園を今后同會の附屬事業となし、尙一層其の規模を大きくする計畫なりとの事なる

が、同會本年秋季總會を二十二日(十一月)正午より同町善道寺にて開會し、餘興に狂言三曲活花等の催しあり。

●音樂會 神戸市私立親和女學校にては、過日午後一時より同校に於て音樂會を催し、職員生徒の洋樂彈奏及生徒の唱歌等ありたり。

●孤兒院の新築設計 兼て御報導なしおきたる神戸孤兒院にては、八十有餘の可憐兒を教養しつゝありて、猶續々入院の申込あるに、其の院舎狹隘にして大に不便を感じつゝあるにより、新築の設計あれど同院の積立金は敷地購入に充つるのみにして、家屋新築費の出所なく、勢之れを世の慈善家の寄附に仰がざるべからずして、大に世人の同情を求めつゝあり。

●面白き結婚 本縣下有馬郡名鹽地方にては實

に結婚の状態面白き風あり、其れは男女見合をなして后直ちに其の式を挙げずして、女子は暫く男子の家に毎夜毎夜通勤し、而して後女子妊娠すれば始めて婚姻式を舉ぐといふ、若し女子妊娠せざる時は何年間にても斯くなし居るといふ、中には妊娠せざるため又は男女不道徳のため時に破談になるも少からず、故に遠距離の結婚は男女通勤困難のため、極く近傍の村落にて行はるる由なり、斯の如き有様なれば一村擧げて親族關係を有するなり、尙ほかゝる土地には自然的男女婚姻の年齢は一般に早く、又右の影響として分家するものも多くなるべし、然るに、第一斯る土地に遺傳的病原だにあらんには、實に危憂のことといふべく、又分家の多くなることは其の土地に少なからざる生活上の問題に影響を及すべしとの事なり。

居所移轉　小生今般本縣下武庫郡魚崎裁縫學校内に移轉致したれば本會並に本會員諸君に御一報申上候(十二月九日通信)

## 家庭教育

松本孝次郎　講述

家庭教育にとりて参考とすべき著述は多くあるけれども未だ兒童心理の研究と連絡を保ちて家庭教育上の問題を論述したものは少ない様に考へるから此點に重きを置いて家庭教育に關係した著述を公にするつもりであるといふ著者の緒言で家庭教育叢書第一編として現はれたのが本書である。家庭と兒童、婦人と兒童、兒童の健康、兒童の情育、子供話に就きて兒童の賞罰、兒童の言語、兒童と遊戲、家庭に於ける學齡兒童の衛生、家庭のため、家庭と青年、德育に就きて、などいふ題目の下に種々有益な參考になる是非共世の阿母さん方の心得られたい事が掲げられて居る。著者の如く身を兒童研究に委ねて居らるゝ心理學者の手に由て此類の書の成つたのは家庭教育の上から考へて誠に喜ぶべき事である。兒童學者は學者、兒童を實際に教育する阿母さんは阿母さんと別々に離れて居つては洵も十分の進歩は望まれぬので兒童學者は阿母さん方の理解する様に學理をも實際をも説き阿母さんは又熱心に學者の言ふ處に耳を傾けよく之を解して實行するといふ風になるさとはじめて兩者協力で家庭教育が眞に進むのであるが、本書は恰に此點に向つて貢獻する處が多いであらう。言文一致で平易に書かれて居るから何人にもよく分る。願はくは世の阿母さん方が

是非一本を座右に備へて一讀再讀して兒童教育に資せられたい。  
本書中兒童の健康に關する事は主として二ヶ處に掲げられて居るがもつと詳しく説かれたらば他の部分で精神的方面に多大の注意を與へて居らるゝのに對して今一層有益であつたらうと考へる。  
しかし一母子にそうまでもといふ事ならば別に此叢書の一編として主として身軀的方面に關する注意を集めたものゝ出でん事を望む。されば本書と相並んで世の阿母さんの爲に與ふる利益はいかに大きいであらうか。(定價五十錢、金昌堂)

## 會 報

本會常會 舊臘十二日第二土曜日、華族女學校に於て、本會第卅七常會に兼ねて、會員の親睦を計り且つ此半日を樂しく過ごさんとの主意を以て、忘年の會を催うしぬ。集まる者、男女會員客員とも、合はせ七十名許り、野口幹事、司會の任に當りて、開會の主意を述ぶるや、中村主幹は、簡単に、會合の利益といふ意味にて演舌せられ、次に、ミセス、グリーン 伴奏の下に野口、田中、

松村、小關、山中諸氏の合唱は一同の喝采を拍したり、終りて、岸邊福雄氏は左の動議を提出す  
市内各區の相近き幼稚園は、互に一團體となりかくて、數團體出來たる後、各團體に於て、研究、實驗せられし事項を、交番に、本會に提出して、批評研究すること。  
一同異議なく可決、但し實行の方法に付てきは、尙幹事に於て調査の上報告することとしたり。  
右終りて、懇親會に移りぬ。舞蹈するものあり、歌留多とるあり、ローンテニスを試みるあり、而して、其間に、三々五々うち連れて、食堂に趣けば、こゝには紅茶、團子、おすし、サンド井ツチ等の御馳走は設けられ居たり。  
かくて、午後五時、夕陽の傾くと共に、散會し終りぬ

八十一

立花 せ 人  
櫓崎 景 一  
山村 助太 郎  
田村 い 五  
齋藤 せい 三  
阿部 の お 六  
山根 の お 七  
魚崎 あ さ 八  
保井 この 九  
加藤 せ 十  
安東 て い 十一  
木村 寅 枝 十二  
根来 政 衛 十三  
藤岡 と き 十四  
内田 た ね 十五  
岩田 ゆ き 十六  
益田 一 枝 十七  
奈良 あ い 十八  
平川 よ し 十九  
加藤 ま つ 二十  
藤谷 ま つ 二十一  
安藤 さ い 二十二  
柏木 ふ さ 二十三  
船木 や す ね 二十四

石津まつえ 村田きぬ 高田ます 岩瀬かよ 榮岡ます 勝村こま 多湖甲子 廣瀬銀子 鷹屋直 阿部つる 新波やす 下村三四吉 中村五六 福間恭 吉川さい 早川いし 千田孝壽 安藤ゆき 伊藤いつき 磯畑せい 大山千代 森本たみ 平山よね 岸邊福雄

七〇	七〇	六〇	一〇	二〇	五〇	二〇	八〇	一一〇	一六〇	一四〇	一一〇	六〇	五〇	五〇	四〇	八〇	一〇〇	一〇〇	六〇	六〇	四〇	六〇	六〇	六〇
三六、六	三六、六	三六、一〇	三六、一二	三六、一一	三五、四	三六、九	三五、一二	三五、一二	三五、七	三五、七	三五、一二	三五、六	三六、六	三六、六	三六、七	三六、三	三四、一	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一一	三六、一一	三六、一一	三六、一〇
三六、一二	三六、一二	三七、三	三七、三	三七、四	三五、八	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三五、一一	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三四、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三七、四	三七、四	三七、二	三七、三

山崎	成瀬	湯河	谷	高野	平野	岩川	手塚	石井	鈴木	加藤	櫻井	石川	柴田	岡山	井上	中桐	佐野	森川	神通	新免	吉田	高木	山田
い	き	さ	く	わ	み	ひ	二	次	重	け	華	き	た	吉	代	太	と	清	せ	義	は	ま	す
よ	よ	だ	ま	さ	よ	さ	夫	夫	重	重	華	き	た	吉	代	太	と	清	せ	義	は	ま	す

六〇

三六、七——三六、二

古田

重

## 會費御納附につきて

在京會員の會費は従前の通り御便宜上  
現金又は爲替にて御納め下され度く、  
未納の分は東京集金社を以て集金いた  
させ候に付き右御承知願上候。但し  
フレーベル會及會計幹事の印章なき受  
取證は一切無効と御承知下され度候。

フレーベル會

# ●第一卷第八號發行●會員に特待法あり

(三ヶ月以上前金申込者を以て研成會々員とす)

## 月刊 教授界

- 定價 一冊 金拾參錢
- 郵税 金壹錢五厘
- 三ヶ月 分 金四拾貳錢
- 六ヶ月 分 金八拾錢
- 一ヶ年 分 金壹圓五拾錢

(郵税共)

● 申込は前金に限る ● 郵券代用一割増の事 ● 見本は一錢切手拾三枚にて送本す ● 第壹號より希望せらるゝ方多きに依り凡て取揃へあり何時にても御注文に應ず

本誌毎號各府縣物産精圖と、其正確なる起源、統計、販路等に關する解説とを其卷首に挿入し、● 論說 ● 教授及訓練 ● 教案 ● 体育及音樂 ● 實科教授 ● 實業科 ● 學校及家庭 ● 實驗研究 ● 學術 ● 讀者之文苑 ● 雜錄 ● 彙報等の諸欄は悉く本會の主義に悖ることなく、一として實際的ならざるはなく、如何に其應用的なるか、如何に奏効的なるか、小學教育者并に其父兄諸君の實際に徴せられんことを望む

發行所 發賣所

東京市神田區西小川町  
壹丁目壹番地

東京市神田區西小川町貳丁目  
壹番地(電話本局三〇五〇番)

研成會 三育舍



# ◎石井式割烹

習學者募集

本年本月ヨリ 授業日數ヲ 増加シ 學科ヲ 精撰  
シ 特ニ 惣菜料理及西洋料理ノ 專修部ヲ 開始  
ス

## 石井式家庭料理部

日曜科 金曜科 授業

## 日用惣菜料理部

土曜日 授業  
學期六ヶ月

## 實用西洋料理部

水曜日 授業  
學期六ヶ月

◎詳細規則入用者ハ貳錢郵券封入申込ベシ

東京市京橋區鈴木町十一番地

大日本割烹學會

明治三十七年

一月

## 割烹教場

女子部

# ◎石井式作法

習學者募集

本年本月ヨリ 女子作法速成科ヲ 開キ 短時日  
ノ 習學ヲ 以テ 實用作法 一般ヲ 知ラシム

## 第一 石井式作法

毎月一日始 七日終  
一週間ニテ卒業

## 第二 石井式包方

八日始 十四日終  
一週間ニテ卒業

## 第三 石井式花結

十五日始 廿一日終  
一週間ニテ卒業

◎習學者ハ各自志望ノ部ヘ入學スルモノトス  
右各部トモ東脩金參拾錢 授業料金五拾錢

## 石井式婚禮式

廿二日始 廿八日終  
一週間ニテ卒業

◎東脩金壹圓 授業料金貳圓五拾錢 原料費自辨

東京市京橋區鈴木町

大日本禮節學會

一月

## 作法教場

明治三十四年二月廿八日內務省許可  
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可



# 唱歌教科書

◎空前の唱歌良教科書！  
◎檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢  
◎文部省檢定済

郵税一冊に就き金四錢

生徒用	教師用
全四冊	全四冊
第一卷 定價金三十錢	第一卷 定價金三十錢
第二卷 定價金三十錢	第二卷 定價金三十錢
第三卷 定價金三十錢	第三卷 定價金三十錢
第四卷 定價金三十錢	第四卷 定價金三十錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科書と  
なる非常なる大喝采  
を博し僅々數月間に  
三版發行の盛運に會  
したる本書は今其  
生徒用教師用共に文  
部省の檢定を経て更  
らに其眞價を發揮す  
るに榮を得たり  
從來文部省檢定済  
し集世に刊行せる  
歌集は悉く教師用  
即ち教師の参考書  
のみに許せられたる  
し眞の教科書と  
て檢定を経るも  
は實に本書如く  
り以て本書を  
該科の教授に  
なる良書たる  
るに足るべし  
るに足るべし  
るに足るべし

●洋琴 金參百圓以上 各種

●ヴァイオリン 金五圓以上五拾圓迄 各種

●鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種  
●舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

●樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル  
金四圓以上其他バス、バリトン、テナー、アルト、  
コルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾  
圓迄

●鼓隊用樂器

太鼓金貳拾圓以上 横笛金壹圓以上  
○學校用一組拾參圓

●手風琴 金貳圓五拾錢以上 各種

●保險 山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢  
以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジ  
レット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

●ピアノ、調律修繕

●郵券貳錢目録進呈